



都市を考へ、都市を創る情報誌

「エフ・ユー・プラス」

ISSN 1881-6541

Fukuoka Asian  
Urban  
Research  
Center

NO. 8

都市を考へ、都市を創る情報誌  
エフ・ユー  
プラス

都市を考へ、都市を創る情報誌  
「エフ・ユー・プラス」

 **URC**  
Fukuoka Asian  
Urban Research Center

都市情報誌  
エフ・ユー・プラス 第8号  
2009年12月18日発行



fuc

Fukuoka Asian  
Urban  
Research  
Center

NO. 8

都市を考へ、都市を創る情報誌  
エフ・ユー  
プラス

特集 路地 —そこに見る人の暮らし・都市の姿—

## C O N T E N T S

### 特集 路地

- 01 そこに見る人の暮らし・都市の姿
- 02 グラビア  
路地の風情、路地のぬくもり
- 04 福岡の路地と経済活動  
～クリエイティブクラスの集積～  
有限会社アイ・ディー Webプロデューサー/  
(財)福岡アジア都市研究所 平成20年度市民研究員 吉良 幸生
- 05 ロジの住宅における「社会的価値」と「経済的価値」の相互作用  
吉原住宅有限会社 代表取締役/  
(財)福岡アジア都市研究所 平成20年度市民研究員 吉原 勝己
- 06 福岡市路地マップ
- 08 路地とコミュニティ  
■城南区鳥飼校区  
～防災・防犯マップづくりを通じて地域を知る～  
■中央区小笹校区  
～Dream Road In Ozasa! 小学生が歩いて考えた～
- 10 路地を舞台に活動するグループ  
～福岡市の事例～  
■紺屋2023～大名苑、未来の雑居ビル～  
■晴好実行委員会～新しい路地のコミュニティづくり～  
■福岡市観光案内ボランティア協会  
～ホスピタリティ溢れる博多・福岡の語り部～
- 12 フォトエッセイ  
福岡の路地  
中国人間居住環境委員会 常務副秘書長/  
(財)福岡アジア都市研究所 平成20年度客員研究員 肖 溪
- 13 通学路から一步を踏み込んで  
路地へのイザナイ  
TEAM UKS PROJECT  
(九州大学大学院 統合新領域学府 ユーザー感性学専攻 修士課程)

- 16 他都市事例～長崎市・神戸市～  
■路地裏や 尾曲がり探し 猫さるく  
日本「長崎ねこ」学会  
■全国路地サミット in KOBE  
全国路地サミット2009 in KOBE 実行委員会事務局/スタジオ・カタリスト  
松原 永季
- 18 福岡アジア都市研究所セミナー  
路地・路地裏シンポジウム  
～路地の魅力発見～
- 22 まとめ  
路地をいかすまちづくりがある  
(財)福岡アジア都市研究所 理事長 樗木 武
- 24 データで見る福岡市 vol.8  
(財)福岡アジア都市研究所 特別研究員 岡田 允
- 26 アジア文化  
アジアの現代ダンス②  
韓国民衆文化の伝統と現代ダンスの感性  
ダンス批評家/群馬県立女子大学専任講師 武藤 大祐
- 28 アジア太平洋都市サミット  
第8回アジア太平洋都市サミット  
実務者会議IN福岡開催!  
(財)福岡アジア都市研究所 交流推進部長 アジア太平洋都市サミット事務局 山本 公平  
第8回アジア太平洋都市サミット  
実務者会議IN福岡  
「文化・芸術活動による都市の魅力づくり」で  
「市民参画・協働プログラム」が目指したもの  
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 山下 永子
- 32 中国街角スケッチ  
内モンゴル地区の都市開発  
(財)福岡アジア都市研究所 副理事長 松本 法雄
- 33 インフォメーション/次号予告



# f u #

## 特集

# 路地

—そこに見る人の暮らし・都市の姿—

20世紀。100年前に自動車の近代的量産化が始まり、数千年に及ぶ人間の生活と都市のあり方を大きく変えた。近代都市計画もその流れの中で、一貫して「広い」「まっすぐな」道路の整備を重視して進められ、「路地」を片隅に追いやってきた。そのお陰で我々は便利な交通や防災という恩恵を享受している。

しかし、その利便性の陰で失ったものがあるのではないだろうか。まちからコミュニティを追い出しつつあるのではないか。気の休まりにくい無機質なたたずまいを増やし、ヒューマンスケールの心落ち着く空間を減少させてはいないか。そして、本来多様であるはずの世代や価値観の拒絶へとつながってはいないだろうか。

機能的・効率的とは言えないかもしれないが、身の丈にあった、どことなくほっとさせる空間。さらには、混沌の中で文化を醸造する空間。そんな「路地」からまちを考えてみる機会があってもいいと思う。単なる懐古趣味でなく、本当の活性化に向けた古くて新しい方法として。

# 路地の風情、 路地のぬくもり



# 福岡の路地と経済活動

～クリエイティブ・クラスの集積～

有限会社アイ・ディー Webプロデューサー/(財)福岡アジア都市研究所 平成20年度市民研究員 吉良 幸生

## クリエイティブ・クラスを集積する路地の可能性

近年、路地においてクリエイティブな人々の活動が活発化している。

九州随一の商業集積「天神」に隣接する大名地区は、昔ながらの町並みを残した居住空間としての佇まいと、若者に人気のファッション・雑貨・飲食店、そしてITベンチャーやクリエイターの活動拠点が混在した、独特な雰囲気のある街区となっている。

アメリカの都市経済学者リチャード・フロリダは、21世紀経済の担い手をクリエイティブ・クラス（広く創造的・知的職業を担う人々、エンジニア、デザイナー、アーティスト、クリエイターなど）とし、都市の発展を左右するとしている。「価値の創造」が都市にぎわいをもたらす。

## 福岡の路地で展開されているクリエイティブな取り組みの状況

### (1)天神・大名WiFi化計画

この計画は、公衆無線LAN利用により地区全体をネット空間化することで、観光、ショッピング情報などを提供し、利便性を高めることをねらいとする。ノートパソコンやスマートフォン、小型ゲーム機などで情報にアクセスすることができる。こうした異なるメーカー機器間での相互接続性を認証されたことを示すものがWiFiサービスである。

天神・大名WiFi化計画の展開には3つの意義がある。ひとつは、まち全体をカバーするスケール感。天神・大名地区の公衆無線

LAN機器は約100ヵ所となっている（2009年6月現在）。WiFiサービスにより、地図と組み合わせたイベントや店舗情報の提供が可能となった。ふたつ目は、ボランティアで活動が展開されている点である。天神・大名WiFi化協議会は、福岡県や市、IT企業約10社などで構成されている。彼らを動かしているものは、何よりもまちと事業に対する思いや誇りである。3つ目は、まちづくりに係る他のプロジェクトとの連携の可能性である。WiFiサービスをまち歩きのナビゲーションとして活用することで、技術の目新しさととどまらない広がりや相乗効果が期待できる。

### (2)AIPカフェ

「AIPカフェ」は、NPO法人高度IT人材アカデミー（AIP）が人材交流などの拠点的役割を担う場として設立した多目的交流スペースである。2008年、「紺屋2023」（P10参照）にオープンした。路地奥の隠れ家ともいえるAIPカフェは、クリエイティブな活動をする人々の感性を大いに刺激し、様々な人々や地域社会との接点を持ち始める場となりつつある。

前述の天神・大名WiFi化協議会も、このAIPカフェに集う人々を中心に構成され、IT関連をはじめとするクリエイティブな人々と、地域の住民や地元企業・店舗との交流の場として大きな役割を担っている。

## 路地が経済活動に果たす役割

路地をクリエイティブ・クラスの集積の地とすることを提案する。

路地にアンチ合理性やノスタルジーとい



AIPカフェ

う言葉を越えた付加価値を見出す人々も増えている。路地での店舗展開は、経費負担面でのメリットだけでなく、自分なりのスタイルを表現することができるという利点がある。個性的な店舗が集まることで、さらにまちの求心力が高まってゆく。こうした洒落た路地が商業空間としてにぎわいを形成したのが大名だといえるだろう。

クリエイティブな活動がまちづくりに関わる重要なポイントは、金銭的な報酬の多寡ではなく、才能を生かす機会と場を提供することである。路地というスケール感が、コミュニケーションを加速し、更なるビジネスの連携や新しい価値を創造する。こうした路地における経済活動がまちにぎわいをもたらすのである。

天神・大名WiFi化計画  
http://www.kyushu-wifi.net/  
AIPカフェ  
http://sites.google.com/site/aipcafe/



きら さちお

1970年福岡県生まれ。九州大学法学部法律学科卒業後、地元経済団体勤務を経て現職に至る。主に地場企業やまちづくり関係のWebサイト構築支援、プロデューサーを担当する。2008年、福岡アジア都市研究所の市民研究員として「魅力ある路地・路地裏の復興と再生」をテーマに路地について研究。その後も、路地と経済活動の関係について独自に研究を進めている。

# ロジの住宅における「社会的価値」と「経済的価値」の相互作用

注) カタカナでの「ロジ」の表記は、「路地」のイメージ転換を促すためにおこなった

吉原住宅有限会社 代表取締役/(財)福岡アジア都市研究所 平成20年度市民研究員 吉原 勝己

スクラップ・アンド・ビルドからストックの時代に入った今、都心部にあるロジを使いこなす発想はコンパクトシティを目指す福岡にとって今後の課題である。中央区春吉はロジのまちとして好立地でありながら、同様のまち大名に比べ賃料・地価が極端に低い。そこで、ロジの社会的価値と経済的価値の相関に注目し、今後の住居系ロジのまちとしての姿を想定してみた。

## まちの社会的価値が経済的価値に与える影響

ロジ再評価のためには、社会的価値である「住人の生活の質」のみならず、経済的価値である「不動産評価」の双方を向上させる必要がある。ある研究では、地域の犯罪率の上昇が地価の低下、教育レベルの向上が賃料の上昇、景観の向上が不動産価格の上昇を呼ぶなど、生活の質と資産価値との強い相関が指摘されている。

そこで、生活の質の向上には、両価値の相関を理解したうえで活力ある住民活動が必須である。そして、その活動の中で、本来ロジが得意とした「コミュニティ」をうまく使いこなすことがポイントになる。

## 春吉の「コミュニティ」

春吉では、自治会を補完する住民主導のまちづくり組織「晴好実行委員会」が新たな動きとして注目されている。

●表1：ロジ再評価のためのSWOT分析から求められた、理想のロジの一例「多世代フォロー型ロジ」

検討課題	福岡の明るい見通し	福岡の暗い見通し
春吉のロジのコミュニティによる魅力を引き出し、ロジを残すことで社会的・経済的にプラスとなる可能性を見出した	Opportunity ・世帯数はまだ増加する ・観光客、留学生は増加する可能性がある ・住まいが中心部へ向かう ・職住近接の流れがある	Threat ・不景気である ・地方自治体は財政が厳しい ・地価は低下傾向である(売却しづらい) ・少子高齢化
春吉ロジの強み	Strength ・都心である ・利便性に対し賃料、地価が安い ・車が少ない ・コミュニティが存在する ・歴史がある・戸建が残っている	Weakness ・安全性が高いとはいえない ・景観が良いとはいえない ・地権者が遠方
春吉ロジの弱み	Weakness ・安全性が高いとはいえない ・景観が良いとはいえない ・地権者が遠方	Strength ・都心である ・利便性に対し賃料、地価が安い ・車が少ない ・コミュニティが存在する ・歴史がある・戸建が残っている

る(P11参照)。都心部コミュニティ形成には従来の自治会制度(縦系)の他に、市民が生みだす任意のまちづくり活動(横系)が必要である。複雑化する都市生活の中、従来型のみでは限界があるからである。このような動きは、私も関わる冷泉荘プロジェクトをはじめ、箱崎・大名などでも発生しており、今後の都市コミュニティモデルとして注目すべき流れである。

もし、春吉のロジを住居系ロジとして考える時、複層化したコミュニティとともに、未来的シナリオが描ければ、再開発を上回る魅力を創り出せるかもしれない。

## 未来のロジ

SWOT分析によりロジの将来像を考えた(表1)。「春吉のロジの強み」と「福岡の暗い見通し」から「高齢者ケアタウンロジ」、「春吉のロジの強み」と「福岡の明るい見通し」から「職住近接子育てロジ」。この2つの将来像を組み合わせて、高齢者と子育て家族が住む「多世代相互フォロー型ロジ」を仮定した。

居住用建物を中心で、高齢者が多くその数が増加傾向にある春吉のロジ。高齢者は現在の住まいを変えたくないと言われる。そこでまずは融資・補助金を工夫し、耐震・耐火・ユニバーサルデザインを含めたリフォームで住み続けられる環境を整備する。これにより、もしもの時

につながるだろう。さらに、空室や空間をデイサービスや地元のサロンとして活用するなどコミュニティ力を高める仕掛けもあり得る。また、春吉には古くからのクリニックが多く、在宅ケアなどへの協力体制が期待できる。柳橋連合市場や飲食店からの食事サポートがあれば、馴染んだ界隈を終の棲家として、高齢者の生活の質の向上が期待できる。

一方、子育て世代の「戸建て賃貸」需要は多いが、都心部の物件は数少ない。ロジの戸建住宅を先のリフォームでこの世代向けにも対応しておけば、有力な市場となる可能性がある。



春吉の古アパートロジ 春吉の住居系ロジ

春吉小学校が近く、歩いて天神へ仕事に行ける。さらにロジの空室に保育所・塾などを設置すれば、福岡でも稀なワークライフバランスの界隈が形成できるのではないか。そのうえで高齢者と子育て家族間での交流ができれば、両者の生活の質の向上も期待できる。

さらに、ロジが物理的に持つコミュニティ力は、防災・防災・清掃活動、高齢者と子どもの触れ合い、教育、景観形成など、社会的価値の向上をもたらす。それが経済的価値の向上につながれば、再開発の意義は薄れていく。

福岡のロジの住まいは、住民が夢を持ち発想できる地域資源として眠っており、信頼に基づき多様なコミュニティ展開の場としての再評価が待たれる。その時期は近いかもしれない。



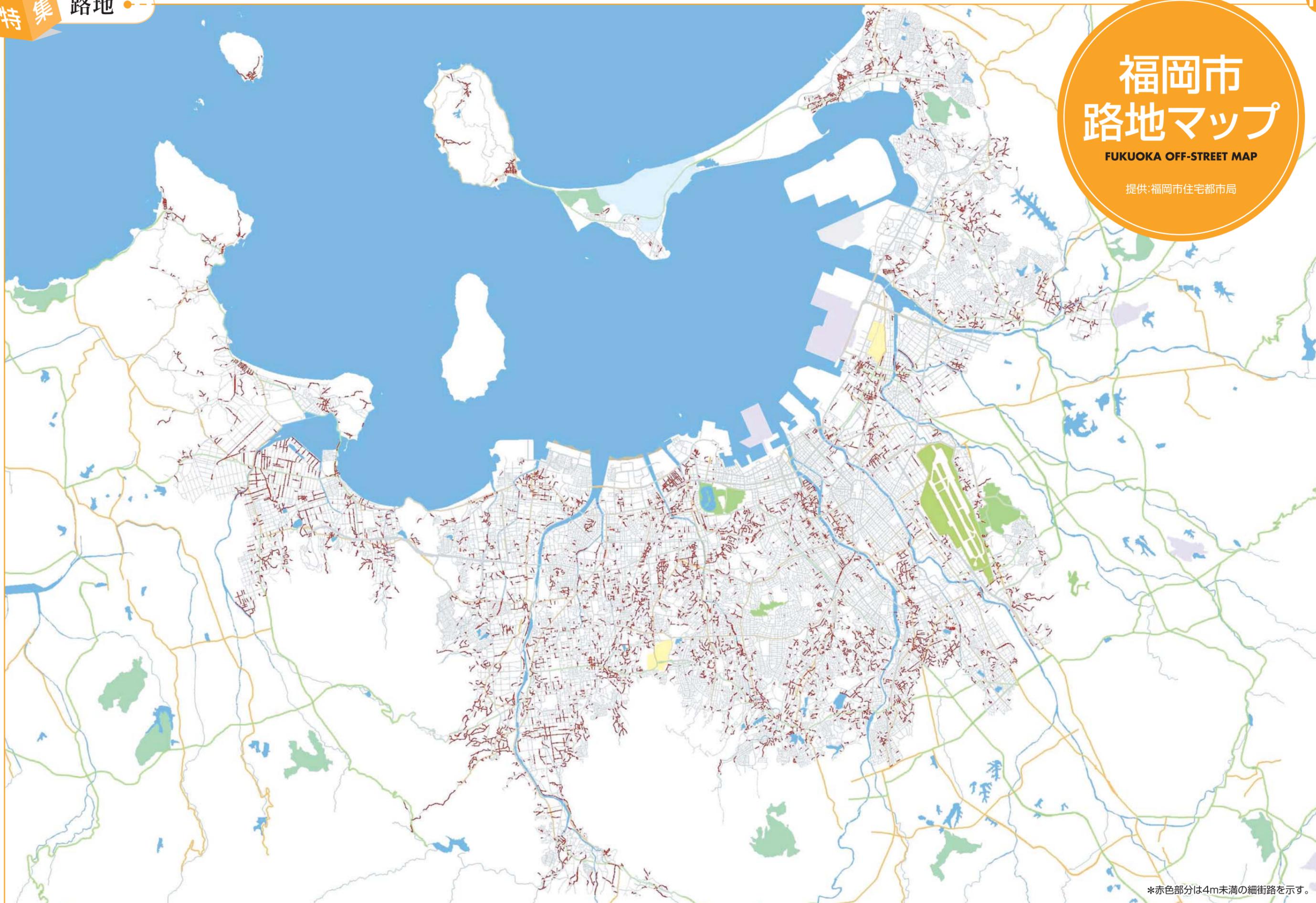
よしはら かつみ

1961年福岡県生まれ。春吉小学校出身。九州大学理学部卒業後、旭化成株式会社を経て吉原住宅有限会社入社。NPO法人福岡ビルストック研究会理事長、株式会社スペースRデザイン代表取締役。著書に「エンジョイ、レトロビル! 未来のビンテージビルを創る」(2009年/書肆侃侃房)。

# 福岡市 路地マップ

FUKUOKA OFF-STREET MAP

提供:福岡市住宅都市局



\*赤色部分は4m未満の細街路を示す。

# 路地とコミュニティ

地域コミュニティにとって路地は身近な存在である。住居がある場として、通学路として。もっと快適に安全に使えたらと2校区の住民や子どもによって行われた特色ある取り組みを紹介する。

## 城南区鳥飼校区～防災・防犯マップづくりを通じて地域を知る～

今年4月、城南区鳥飼校区で各世帯に配布された「鳥飼校区防災・防犯マップ」。大変使いやすいマップとして愛用されている。これは、小学校の地区委員・中学校の地域委員・民生委員・長年お住まいの方が情報を持ち寄り、1年をかけ「本当に使ってもらえる」ことを念頭に作成したもの。子どもを持つ親は犯罪・事故、民生委員は高齢者の防犯・防災に関心が高かったとのこと。作成に当たっては、まちを実際に歩いてみて検証。

この地域は地盤が低く、過去にあった水害の話聞いて参考にしたという。地域の防犯防災組織からの情報提供も受けている。

このマップはA2サイズで、その半分は「鳥飼校区防災・防犯マップ」、残りが「我が家の安全マップを作りましょう」となっている。前者は、暗い場所でも見えるよう避難場所に蛍光塗料でマーク、水害に備えて海拔の高低で色分けされている。後者は校区の白地図で、自分たちが日



常通る道や災害時のルールを書き込むことができる。民生委員と高齢者がマップに病院や連絡先を書き込む話し合いの場を持ち、緊急時のスムーズな対応が可能となった例もある。

マップを作りに関わった人々からは「自分たちのまちの安全は自分たちで守る」という意識を高めて欲しいですね（自治協議会防犯部長・柴田さん）、「皆さんと地域を歩いたり話し合いを重ねることで地域に愛着が増しました」（松尾さん）という声が聞かれた。路地を材料にした活動がコミュニティ形成に一役買った好例といえるだろう。また、樋井川沿いの道の愛称はマップ作成の際に公募し「ハミングロード」と名づけられている。



## 中央区小笹校区～Dream Road In Ozasa!小学生が歩いて考えた～

### ストリートネーミング

小笹校区は、昭和30年代に開校した小笹小学校・平尾中学校が位置する比較的歴史の浅い自然が豊かな坂の多い住宅地である。PTAや子ども会の役員経験者を中心に「ミセス&ミセスの会」が小笹公民館主催事業で立ち上がり、校区男女共同参画協議会と校区自治協議会・自治会連合会の協力のもと「女性たちの地域おこし」として平成18年4月から平成19年6月に小笹校区「ストリートネーミング」～通学路に愛称をつけよう～に取り組んだ。校区には名称がない通りが多く、勉強会で地域の歴史掘り起こしやウォーキングを実施、公民館だよりで通りの由来や樹木の名前などの情報を公募し、10の愛

がありますし、顔見知りが増えたことで安全につながっています」と公民館主事の石井みき子さん。

### 「見つめよう!見つけよう!ぼくの道・わたしの道」

小笹小学校では、平成19年度第6学年が総合的な学習の時間に「見つめよう!見つけよう!ぼくの道・わたしの道」をテーマに学習を進めた。公民館からのゲストティーチャーより歴史・自然や安全についての話を聞く、一緒に通りを歩くといった連携が図られた。また、児童は福岡市健康づくりセンター(あいれふ)から借用した高齢者装備の着用や幼児と坂道を登るなど異なった立場の体験、さらに校区外の大濠公園調査や赤坂付近で聞き取りなどを行った。また、修学旅行先の長崎でもまちを観察してアイデアを得た。

まとめとして、平成20年2月26日に中央区子ども会議で「Dream Road In Ozasa!」をテーマに提言した。この会議は、平成19年度に中央区役所地域支援課新規事業「子どもの目線応援事業」の一環で、地域行政を担当する区役所関係者に子どもたちが直接提言するものである。動植物園



小笹校区ストリートマップ(小笹公民館)



小笹公民館「ストリートネーミング」子どもたちが見守る中でのプレート設置の様子

へ至る通り「大休山通り」を取り上げた3組は動植物園への期待がワクワクふくらみ、小さい子どもからお年寄りまで楽しく歩ける道にするためのアイデアを発表した。60個以上あるマンホールに動植物の絵を入れたものにする、街灯に動物のキャラクターをつける、小

さい子どもやお年寄りにはつらい坂道にはゾウの形をしたベンチを置くというもの。卒業文集で、神崎佑弥君は「ロケット公園通り」の急な坂には手すりにも使えるガードレールをつけた安全で楽な歩行を提案し、それが不可能でも「高齢者が困ったときに助けることができる人になっていきたい」と記している。



ゲストティーチャーと道を歩く



高齢者体験



子ども会議

神崎 佑弥  
二学期になつて小笹の道に関する総合がいよいよ始まりました。10通りある小笹の道を高齢者や子どもが通りやすい道にするために、道を改善していくプロジェクトです。小笹は高齢者にとってきつい坂がたくさんあります。とくにロケット公園通りはきつい坂なので改善するべきだと思いました。  
高齢者になつて道を歩く疑似体験をしました。高齢者グッズを使うと重りがずごく重くて坂をのぼる時は自由に動かせませんでした。下る時は体が前に倒れ、しまい倒れそうになりました。高齢者にと、坂は大変なのがよくわかりました。モコモコ、坂にガードレールをつけたい。いのではないかと考えました。ガードレールも手すりに使うと高齢者や子どもにも安全だし、急に坂をのぼることのできてみんなも使えるのでいい改善案だと思いました。  
ぼくの考えたガードレールが作られ、高齢者や子どもにと、安全で楽に通れる道になってほしいです。たとえそれが作られなくても、高齢者が困っている時はまごに助けることのできる人になっていきたいと思っています。

# 路地を舞台に活動するグループ ~福岡市の事例~

福岡の路地で際立った活躍をしている3グループを紹介する。目的ややり方も異なる活動にいろいろな人が関わっている。人種・国籍を越えた未来志向のプロジェクト、地域を越えた活動、ホスピタリティ溢れるおもてなし。自由に参加できるイベントもある。

## 紺屋2023~大名発、未来の雑居ビル~

### 紺屋2023とは？

TRAVEL FRONTが企画・運営する建物再生プロジェクトTRAVELERS PROJECT「紺屋2023」が大名で進行中だ。築45年のビルの17部屋に15年限定(2008~2023年)で様々なディレクターが集い、業種・年齢・国籍・民族・時間・用途・目的など様々な要素が雑居し、集合・離散しながら思考・試行を重ね、新たな価値と文化の醸造を目指す。コンセプトは「未来の雑居ビル」。主宰である建築デザイナーの野田恒雄さんは「従来の建築はハード面だけだったが、ここではソフト面まで関わりたい。日々の挑戦を旅のように楽しむ人(トラベラー)のため場づくりがトラベラーズプロジェクトです」と語る。



写真1: エントランス



写真2: 紺屋サマースクール2009

これが中に入っていき楽しさや高揚感を誘い、大名の雰囲気にも合っている。

### 入居者と様々なイベント

各部屋の機能は、IT系NPOやデザイナーのオフィスの他、ギャラリー、紹介制の滞在スペースなどがある。日中韓のメンバーが運営する「アジアフォトグラフィーズギャラリー」やコンテンポラリーダンスのスタジオ「コテックス」などは、外部の人が部屋に入れる機会もある。また、関係者の協力のもとTRAVEL FRONTが企画して行く「夜会」「サマースクール」(写真2)「紺屋屋台」などが定期的に開



写真3: 様々なフラッグ

催されている。「将来のビジョンはあえて持たないようにしている」と野田さん。「各入居者の創造性が最大限発揮される場をつくることにだけ集中する。その結果が未来なのです」

### TRAVEL FRONT (紺屋2023事務局)

11:00-20:00/不定休  
〒810-0041 福岡市中央区大名1-14-28 第一松村ビル201+202 TEL/FAX:092-984-6292  
E-mail:travel-front@travelers-project.com URL :http://travelers-project.info/konyu2023/

### 路地的空間

デザインにもこだわりが見られる。幅約2m奥行約15mの通路を奥に入ると、5階まで吹き抜ける屋外空間が現れる。この通路には昔の日本家屋に見られる焼杉板が使われている。これはかつて大名が城下町であったことも意識しているという。奥に進むにつれて板の幅と間隔が徐々に狭くなっていくデザイン(写真1)。

## 晴好実行委員会~新しい路地のコミュニティづくり~

### 晴好実行委員会とは？

福岡市の中心部・天神に程近い春吉地域(春吉・西中洲・渡辺通・清川・高砂)で、2004(平成16)年に立ち上げられたまちづくり活動組織。メンバーは地元の商店主を中心とするが、春吉居住者だけではなく外部からも多数参加している自由さで、意思決定と行動が早いことを身上としている。ホームページ「晴好」(明治時代の漢字表記)はHP制作やカメラなどプロのメンバーによる出色の出来栄で人気が高い。他には、サンセルコ広場(渡辺通)で開催し2,000人規模の集客を誇る「晴好夜市」、オリジナル商品として「晴好の風」(田植えや稲刈りから仕込みまで自分たちで行った日本酒)や「弥平バーガー」(約150年前の春吉の偉人・稲光弥平から名付けた鶏肉ハンバーガー)、春吉ファンの女性によるマップ発行やイベントを行う「とことんツーリスト」などの活動がある。

### 路地のコミュニティについて

春吉は土地区画整理事業地には指定されなかったため、今も路地が多く残っている。自身も春吉っ子の実行委員会・友添建二さんは「春吉は住んでいる者からすると便利で非常にいいまちなので皆さんさんしゃいよと、等身大の姿をみせたいと始めました」、同・比田勝大直さんは「路地が吹き溜まりになり、人情などいろんなものを引っ掛けてくれる。昔はマイナスだった路地が今はプラスにはたっている」と語る。6年目を迎えた今、実行委員会の活動がもっと自然に生活・コミュニティの一部となる、つまりまちおこし意識しない参加を促す方向性を模索し始めていると言う。町内のコミュニケーションのきっかけを深めるための仕掛けにしていきたい、とも。また、春吉の中にとどまらず八女市上陽町とコミュニティ同士のつきあいを展開していく予定である。アイデア豊富な委員と共にさらに発展していく期待を抱かせる春吉のまちである。



友添さん(右)、比田勝さん(左)



上陽町で芋の種付けに参加



ホームページ(<http://www.haruyoshi.jp/index.html>)

## 福岡市観光案内ボランティア協会~ホスピタリティ溢れる博多・福岡の語り部~

### 協会について

1991(平成3)年にユニバーシアードを契機に発足した「福岡市観光案内ボランティア」を前身とし、最近ではまち歩きイベント「博多情緒めぐり」(2005(平成17)年~)、「あるつく福岡」(2008(平成20)年~)へ参画。2008(平成20)年春に事務所を設け、向かいの「博多町家ふるさと館」駐在案内業務(10:00~16:00)、歴史探訪(14:00にふるさと館を出発し櫛田神社・龍宮寺・東長寺・承天寺などを案内。60分。無料)も行っている。退職者や主婦など約70名の会員(ガイド)がいる。

### 博多部の路地

博多部は情緒あふれる路地も多い。これは「太閤町割り」といわれる秀吉の時代の名残です。間丈という約2mの幅が基本で、台八車が通れるもの。そのような路地に間口が細く奥行きがある町家が

ありました(副代表幹事・脇山さん)。

### ガイドさん

2008(平成20)年に採用された5期生のガイドさん2人に話を聞いた。英語ガイド・入江さんは「歴史が好きで英語も活かせるので興味を持ちました。のべ3カ月の研修を受け登録。欧米の方は、神社仏閣や伝統工芸品のお土産に興味を持っている方が多いです。これからは英語の観光パンフレットを作りたいですね、若手の猿渡さんは「九州観光マスター検定の3級に合格した時に協会を紹介されました。まだ勉強・修行中です。お手本は先輩方のガイドです」とのこと。また、代表幹事・上村さんは「ガイドは写真ファイルを作るなど工夫を凝らした案内もしています。毎年「地域紹介・観光ボランティアガイド全国大会」に当協会から10名ほど出席し研修や他都市のガイドさんと交流をしています」と語る。案内する地域や内容(観光に加

え企業研修も)の多様化、依頼数の増加を受け一層の活躍が期待される。ホスピタリティに溢れたガイドさんとぜひまち歩きを!



左から、上村さん、脇山さん、猿渡さん、入江さん。



博多部を案内する

### お問い合わせ・お申込み

〒812-0039 福岡市博多区冷泉町2-24(博多町家ふるさと館前)  
TEL:092-283-2111 FAX:092-283-2161  
E-mail:staff@fukuoka-city-guide.com  
HP:<http://fukuoka-city-guide.com>

# Photo essay | 福岡の路地

肖溪 (Xiao Xi) 中国人間居住環境委員会常務副秘書長。都市景観や居住環境の品質向上に取り組んでいます。(財)福岡アジア都市研究所の客員研究員として2009年2月から1カ月間福岡に滞在しました。その時に印象に残った福岡の路地・路地的空間を写真とエッセイで紹介します。



## 「中洲屋台」

夕方になると、どことなく登場してくる屋台の群れ。川辺に並べられ、にわか仮設路地を作り上げる。見知らぬ客同士が肩を寄せ合い、夜の賑わいを演出する。



## 「博多の路地」

福岡の風采は、徒歩でないと感じ取れない。静かな佇まい、過去、現在、未来……、古風で質朴な風情は、午後の紅茶のように、味わい深い。

## 「博多の古寺周辺」

小径を彷徨いけば、佇む僧房ひとつ。物音すべてひそかに沈み、ただ打つ鐘の音のみぞする(曲径通幽処、禅房花木深、万籟比皆寂、惟聞鐘磬声)。ここで唐詩の世界に出会えるなんて、夢にも思わなかった。感激の一言に尽きる。



## 「博多リバレイン傍」

福岡の魅力はその精緻さにあり、ここにいる人がそれぞれの自分を見つけることができる。流れる川に映し出される倒影、簡潔に尽きる親水空間、いつも生活に興奮を与え続けている。

# 通学路から 一步を踏み込んで



## 路地へのイザナイ

目頃、何気なく通り過ぎるそんな路地に、箱崎の風情と文化とあたたかさは詰まっている。もうじき学生から社会人になる僕らは、徒歩から車での移動に変わってしまうのだろう。そうなる前に路地に入り、ヒューマンスケールの路地が持つ力を、多くの人に伝えたい。

### TEAM UKS PROJECT

西田 賢輔 上野 春菜 梅田 ひとみ  
小原 義満 河原 正明 坪田 吉彦  
(九州大学大学院 統合新領域学府 ユーザー感性学専攻 修士課程)

箱崎を形成してきた要素の中には九州大学があるのではなかろうか。路地の多い箱崎には学生のための下宿が立ち並び、そこで生活する人たちのための商店や飲食店などの生活に密着したお店が生まれていった。箱崎は、その地域的特質から学生達がまちの形成の一端を担ってきたため、学生街として広く周知されているのではないかと感じる。

箱崎はこれまでの様な「学生が当たり前にいるまち」とは違う、新しい箱崎の形を見出す必要があると思い始めた。箱崎が、これから箱崎らしさを主としていくにはどうすればいいのだろう。幹線道路から一步踏み込むと箱崎には昔ながらの路地が多く残っていることに気が付く。まさに路地そのものが箱崎らしさではないだろうか。そこで営む全ての人が箱崎に強い愛着を持っている。これからの箱崎には、地元住民や路地にある商店を中心とした、人間味あふれる発展のしかたがあると強く感じる。

そのようなことを思い、考えながら箱崎のまち・路地を歩いてみた…  
すると、これまでの箱崎にはない新しいカタチのお店や地元住民から愛されている店がいくつも路地にあることに気付く。「学生街の箱崎」から「地元商店とそこで生活する人々が中心の箱崎」への転換がはじまっている。  
これからの箱崎を牽引してくであろう、注目のお店を紹介するとともに箱崎と路地について考える。

## 大正レトロの建築が懐かしい「古民家のお店」

### 古民家の温かさが活きるお店

大 正始めに建てられた民家のお店に入ると、親切で気さくな店主野田けい子さんが迎えてくれた。卸屋さんを営んでいるため洋服やアクセサリ、珍しいレトロ雑貨がリーズナブルな価格で豊富に取り揃えられている。路地の中にあるお店には近所の子どもたちが自由に出入りし、近隣



住民が店にお店に立ち寄って会話をを楽しむ姿が見受けられる。

将来的に店の一角を利用した地域の人と触れ合えるカフェを作りたいそうだ。

### まちと人との付き合い

このお店は築90年という文化財としての価値があり、建築学科の学生がよく見学に来る。空

襲を逃れた箱崎地区だからこそ貴重な建物が残っており、この建物を活かしたいと民家を改装してお店を開いたと語ってくれた。今日では作ることが難しいという昭和期の窓があるなど、路地は文化そのものも継承してきた。空襲を逃れた箱崎地区だから屋根裏にあるスペースを利用して、催し物を開催するなど地域との関わりを大事にしている。

道ですれ違えば挨拶をし、子どもと名前を呼び合うなど、地域全体で育てていく箱崎の風土が根底にあるからではないだろうか。だからこそ、人と人との関わりを重視する地域密着のお店が増え、地域の方に愛されるお店になったと思う。そのような一例が古民家のお店ではなかろうか。



## 路地が分かれて、さらに小さい路地へ

路地の冒険に出ると、小さいけれどあったかい  
そんなお店が僕たちを迎えてくれる  
箱崎に住んでいる九大生だから知っている

地域のお店のここだけの話

## 地域密着型のサードプレイス「ナガタパン箱崎店」

### 古きよき箱崎の雰囲気

レトロな雰囲気と、対面式の販売スタイルがナガタパン箱崎店の特徴。お客様とのコミュニケーションを大切に、箱崎の路地にぴったりのお店。おすすめは食パンとメロンパン。

買ったパンは、店内にあるイートインコーナーでゆっくり食べられる。昭和初期の民家を改装した店内でパンを食せば、老若男女だれでも懐かしさと温かさに包まれること間違いなし。さらに、2階の窓から見える表の路地と、正面の箱崎宮の景色が、箱崎のまちをさらに感じさせてくれる。そんな店内のテーブルでは近隣住民が自然と

集まり、井戸端会議をしている光景がよく見られ、時間を忘れていつまでもいたくなる。それは地元住民も遠方からのお客さんも変わらず味わえるものであろう。誰でも古きよき箱崎の雰囲気を堪能できる場、サードプレイスとしてナガタパンはひっそりと路地に佇む。

### 地域とのコミュニケーション

しかし、このパン屋さん、実は11月でやっとな店1周年である。レトロな外観とその盛況ぶりからは、歴史のあるお店かと錯覚してしまう。佇まいとは裏腹にその存在感を1年間で築けたのは、開店時から地元箱崎に溶け込む努力があったからようだ。お店の外観・内装共に、周辺建造物

と統一させるよう最小限の改装にとどめていること。だがそれ以上に、地域の人々との親密なコミュニケーションと関係を大切にしていることがひしひしと感じられた。ケーキ屋さんのような対面式の販売スタイルに始まり、箱崎宮の放生会の時期には店頭ミニライブの開催など。「箱崎はお客様があたたかい」と店主の長尾篤さんは語るが、それはお店の努力がお客様に伝わった結果だろう。

箱崎には今なお、古きよき風土や習慣が数多く残る。そんな土地だからこそ、そこに息づく雰囲気や地元住民との関係づくりを大切にしたいお店づくりに、今後の箱崎の新たなカタチを見た。



## クリエイティブな人々が集う新たなコミュニティ「ブックスキューブリック箱崎店／カフェ&ギャラリーキューブリック」



スタッフ選りすぐりの本が、大切に並べられているお店。お気に入りの一冊に出会えるかも。二階のカフェでは、野菜ベーグルなど人気のメニューが楽しめる。本を片手にカフェで読書、優雅なひと時を。

九州大学と箱崎のまちを声で響きあわせるトークセッション「HAKOZAKI VOICE」が、初めて開催されたのは2009年10月28日(水)20時。ブックスキューブリック箱崎店には、地域の人々や学生が大勢集まった。店内には、出演者である九州大学の南博文教授と藤枝守教授、そして店主大井実さんを中心に、箱崎について語る声が静かに響いた。



## HAKOZAKI VOICE 土地と人は声でつながりあっていく。

少 々緊張気味に始まったイベントは、徐々に盛り上がりを見せ、終了後も人々の語らいは絶えない様子。音楽のこと、子どものこと、本のこと箱崎のこと。地域に住む人々と学生が混じり合って、いつまでも話が続いた。地域とお店が繋がることで、より大きなコミュニケーションの場が生まれ新しい未来が創造されていく。箱崎の持つ古い歴史と学生の持つ新しい知識とで、この地をいかに変えていけるか。地域に支えられて育つ私たちは今、問われているのである。

## 箱崎は路地があるから面白い!



ブックスキューブリックの店主、大井実さんはそう語る。ブックスキューブリックの二号店となる箱崎店は、JR箱崎駅近くにあるカフェを併設した本屋さん。2008年にオープンしたばかりの、このお店は箱崎の新たなコミュニティの場として、地域の人々に愛されている。10年前の都市開発によって、箱崎地区のコミュニティは激変してしまった。そんな状況の中で立ち上がったのがキューブリックをはじめとする、箱崎を愛する小さなお店たち。箱崎に店を構える方の多くがとても親切であたたかく、いつも気軽に話しかけてくれる。

最近では、アーティストなどクリエイティブな人材も箱崎の地に集まってきているらしい。それもみな、日本人が忘れかけている『地域のぬく

もり』を残した、箱崎の魅力のおかげであろう。

路地があることで語らいが生まれ、人々の暮らしが共鳴しあう。大井さんは「ゆつくり街を歩くことでいろんな物が見えてくる楽しみを是非味わってほしい。」「まるで宝探しのように、自分から動かないと見えてこないものがたくさんある。だからこそ路地は面白い。」と、子どものように瞳を輝かせながら語ってくれた。

「さびしくなる箱崎だからこそあるチャンスの隙間。それを、感性で見つけ出し積極的に満たす人が、箱崎には必要なのではないか。そんな人々が集まれば、自然発生的に化学反応が起きて箱崎はもっとおもしろくなる。ブックスキューブリックはそんな人々を魅了して惹き付ける拠点の一つになりたい。」と大井さんの箱崎の未来に託す思いは強い。

歴史の中に路地があり、人々が自然と集まる場所。受け継がれてきた伝統を守りながらも、人の力で変わりゆく箱崎には、大きな魅力と可能性が潜んでいる。



# 他都市事例

## ～長崎市・神戸市～

### 路地裏や 尾曲がり探し 猫さるく

### 日本「長崎ねこ」学会

私たち「日本『長崎ねこ』学会」は、長崎に多く棲息する「尾曲がり猫」を「長崎ねこ」と呼び、そのルーツと尾が曲がった原因を「楽術的」に探求している市民グループです。

長崎市の地形は掘り鉢状で、坂道と階段で構成されていると言っても過言ではありません。不便なことも多いのですが、まち歩きには最適。あまりに複雑な道筋のために開発が遅れ、「江戸時代からそのまま」という道も、わずかではありますが残っているようです。そして、たいいていそのような道、主に路地裏は、猫たちの格好な居住空間になっているのです。

猫さるくというのは、そんな路地裏を猫のしっぽを追いかけてうろつくことを指します。知らない人からは怪しまれ、猫からは不審の目で見られつつ、時間を



猫さるくの様子

見つけては歩いているのです。とは言うものの、学会員全員、本業があるため実施回数が伸ばせないのが悩みのタネですが、今までに計5回の猫さるくを行いました。その結果は…市内7ヶ町の石段や坂道、路地裏で95匹の猫ちゃんたちに遭遇、そのうち「尾曲がり猫」は71匹、尾曲がり率：74.7%、何と4匹中3匹は「尾曲がり猫」という結果でした。

え？ 私たちの調査では心もとない？ではここに、その道(猫のしっぽ道)の権威、京都大学名誉教授・野澤謙先生の研究結果を紹介しましょう。全国12,000匹の猫の調査で、尾曲がり率平均41.7%、長崎はなんと79.0%!いかがでしょうか、この尾曲がり率の高さは!

それでもまだピンと来ない方は、どうぞ長崎へいらして下さい。私たちと一緒に猫さるくをしましょう。入り組んだ長崎の路地裏で、のんびりユツタリ暮す猫たちの、曲がった、あるいは団子、あるいは短〜いしっぽを、どうぞその目でごらん下さい。百聞は一見にしかずですから!



石段の団子尻尾



路地裏の猫たち



くつろぐ尾曲がり



ホームページ  
<http://www.nagasaki-neko.com/>

## 全国路地サミット2009 in KOBE

全国路地サミット2009 in KOBE 実行委員会事務局/スタジオ・カタリスト 松原 永季

### 全国路地サミットとは？

平成21年10月24日～25日、「全国路地サミット2009 in KOBE」が神戸市長田区で開催されました。全国から約100名が集い、情報交換と議論を行い、交流親睦を図りました。このサミットは、路地のまちの保全・再生に関心を持つプランナーや研究者が中心となって結成された「全国路地のまち連絡協議会」(以下「路地協」)が呼掛け人となり、開催地で実行委員会を組織して主催する形式で、今年が7回目。これまで東京、大阪、長野などで開催されています。

### 全国路地サミット2009 in KOBE

今年6月、全国路地サミットに先駆けて「関西路地サミット」を開催し、京都・大阪・神戸の路地のまちづくりの事例を学び、情報共有を図りました。予想以上に幅広い範囲から約40名が参加し、関心の広がりや深さを改めて確認しました。意見交換では「お金になる路地」「生活のための路地」という分類が提案され、それぞれ異なる手法の必要性が議論の

焦点の一つとなりました。

この議論を踏まえ「全国路地サミット2009 in KOBE」では、路地を類型化し、それに対応したまちづくり手法を検討する、という方針を決めました。「路地の類型」については様々な議論がありますが、神戸では実験的に「商業中心型」「商業・生活複合型」「生活中心平地型」「生活中心斜面地型」の4類型を設定することとしました。

サミットでは、全国各地の路地のまちづくり事例の網羅的な紹介から始まり、各類型に対応する(と思われる)大阪・法善寺横丁、東京・神楽坂、神戸・駒ヶ林、神戸・東垂水の各事例を報告いただきました。その後は類型毎に分かれ、各々の手法について議論を深めました。最後の相互報告で「路地のまちづくりは各々すべて固有のものであるが、それを少しずつでも広げていくことが必要」とのコメントが示されたことが、今回のサミットの意義を伝えるものになったと思われます。

### 神戸の路地

サミットに付随して、神戸の路地のま

ち歩きを実施しました。24日は阪神・淡路大震災の被災が大きかった長田南部地区を中心に、翌25日は神戸での4類型に対応する「南京町～乙仲通」「北野～山本通」「駒ヶ林～野田北部」「塩屋～東垂水」に分かれて歩きました。それぞれ「観光地化した戦災復興区画整理区域」「観光地化した明治期以降の斜面地住宅街」「古い漁村集落&大正期の耕地整理により生まれた住宅街」「明治期の郊外別荘地&高度成長期に乱開発された斜面地住宅街」という特性を持つまち中の路地です。神戸市内では災害からの復興まちづくりが積み重ねられたこともあり、具体的な手法として「区画整理区域内の3項道路」「2項道路の細街路整備事業」「2項道路、3項道路、43条但し書きを組み合わせた近隣環境計画」「街並み誘導型地区計画」など、その蓄積が比較的多いといえます。ただ、それらが「路地のまちづくり」として統合的に位置づけられて進められてきたわけではありません。今回のサミットを契機に、神戸市内でも路地のまちづくり手法がさらに開発され、進展することが望まれています。



全国路地サミット2009 in KOBEポスター



会場となった昭和4年建設の旧二葉小学校校舎



趣のある講堂に全国から約100名が参集



路地の類型別議論はワークショップ形式で実施



斜面住宅地の路地のまち歩きの様子

# 福岡アジア都市研究所セミナー

## 路地・路地裏シンポジウム ～路地の魅力発見～

- 話題提供  
吉原 勝己 (吉原住宅有限会社代表取締役/(財)福岡アジア都市研究所平成20年度市民研究員)
- 報告  
梶返 恭彦 ((財)福岡アジア都市研究所研究主査)
- パネルディスカッション  
コーディネーター  
梶田 佳孝 (九州大学大学院工学研究院環境都市部門助教)
- パネリスト  
石橋 知也 (福岡大学工学部社会デザイン工学科助教)
- 吉原 勝己 (吉原住宅有限会社代表取締役/(財)福岡アジア都市研究所平成20年度市民研究員)
- 小牧 重己 (福岡市住宅都市局建築指導課道路判定係長)
- 森田 美代子 (株式会社九州インターメディア研究所/天神経済新聞編集長)  
\*所属・役職はセミナー当時のものです。

- 主催: (財)福岡アジア都市研究所
- 共催: (社)日本都市計画学会九州支部、福岡市
- 2009年10月13日(火) 14:00～16:30
- 福岡市役所 15階講堂

### 話題提供 ロジの魅力発見 ～春吉地区をケーススタディにして～

吉原 勝己  
(吉原住宅有限会社代表取締役/  
(財)福岡アジア都市研究所  
平成20年度市民研究員)



注)カタカナでの「ロジ」表記は、「路地」のイメージ転換を促すためにおこなった

春吉地区と大名は、西鉄福岡駅から同じ距離にあります。しかし、同じロジのまちでありながら、春吉の土地価格は大名の1/3ほどしかありません。ロジの魅力、私は「社会的価値」と呼んでいますが、それが低いことで、地価の停滞が生じていると考えました。

これまで大きく発展した経緯がないまちで、ロジを生かすという発想は、今後、地方都市の再生にもつながる

ような気がします。春吉は歴史的には、住宅のまちとして始まりましたが、近年飲食店が増え、土地の利用度が高い地区です。ところが、地図を見ると、1800年代と現在のロジは変わっておらず、歴史を蓄えてきた限界です。ロジを歩きますと、昔の思い出が蘇るような懐かしさがあり興味が尽きません。また、意識して維持されている建物もあるようです。人目に付きにくいのですが、味のある建物を見つけるのはロジ歩きの楽しみです。また、古い町名の看板が残るなど、映画「三丁目の夕日」のような懐かしい世界があり、ロジは、宝箱のような場所です。

ところで、「春吉の強み」と「福岡の明るい見通し」の中で、春吉ではどのようなロジを今後イメージすべきかと

かつてはまちのあちこちで路地・路地裏がみられたが、土地の有効利用や災害時、防犯上などに多くの問題があるとして、その多くは時代の要請する開発の流れに姿を消し、都市から失われつつある。しかし、長らく問題とされていたその狭小な街路には、今なお暖かいコミュニティが存在しており、また、人間味のある魅力を放つ空間として人々を引きつけ、最近その存在が再評価されている。

今回のシンポジウムでは、福岡市になお残存する路地・路地裏について、その魅力と問題点を再認識するとともに、路地・路地裏から発信する新たなまちづくりの方法等について熱く語っていただいた。

いう分析では、住まいと働く場所が近く、子育てが快適なロジという姿を目指せるのではないかと考えられます。戸建てがこれだけ都心に集中して存在する場所は福岡でも稀な地域かと思えます。一方で、「春吉の強み」と「福岡の暗い見通し」を考えますと、ロジには高齢者がたくさん住んでいますので、高齢者の終の棲家として介護と伴にケアしながら住まえるロジも目指せるのではないのでしょうか。

この2つのロジの組み合わせを想像してみます。高齢者の皆さんの「生活の質」を高めるために、柳橋連合市場や多くの飲食店が連携して宅配の仕組みを作り、多くのクリニックが連携して在宅医療の仕組みを作れば高齢者の住まいとしてのケアタウンロジ

が出来上がります。一方で、リフォームすれば、子育て世代にはこれほどの都心で春吉小学校がそばにあり、福岡市役所近辺まで歩いて通えるような戸建てはなかなかありません。これを組み合わせて考えたときに、子育て世代がお年寄りをサポートし、また、高齢者が子供たちと触れ合うような、相互が補い、生活の質を高め合えるロジのまちが考えられるのではないのでしょうか。そのときに、自治協議会を中心とした地域コミュニティを補完するように、嗜好実行委員会のような市民本位の新たなまちづくりの活動が絡み合うことで、今後のロジの可能性が広がるのではないかと考えます。

### 報告 写真による福岡市の 路地イメージ評価について

梶返 恭彦  
(財)福岡アジア都市研究所  
研究主査



もともと日本には路地が多く、向こう三軒両隣といいますが、そういった、まちづくりがありました。いろいろな環境の変化などにより、自動車に大きく依存するまちにどんどん変わってきました。その中で路地が忘れられていきました。市民にとって、生活視点で考えてそれでいいのかというようなことから、一方では路地を復活していこうという動きもあります。よい路地あるいは残すべき路地というのはどういうものか。これを特定するのは、難しいとは思いますが、客観的に何か指標をつくることはできないかということで、今回イメージ評価を行いました。このようなイメージ評価をとおして、路地に対する認識や理解を深めることも、今後のまちづくりには必要であり、また、得られたイメージ調査結果を、街路やまちづくりのデザインなどに活用できるのではないかと考えています。

今回の路地のイメージ調査では、福岡市内の路地を、住宅系、商店系、飲食店系、オフィス系、寺社系という5つに分類し、それぞれについて、今回は主に大学生を中心に、SD法によるイメージ評価を行いました。これは人間の感性を測定する一つの方法で、反対語の意味の言葉を左右に並べて、その間を、今回は5段階評価ですが、場合によっては7段階とかで、その程度を測る評価手法です。過去の類似調査を参考に、今回の調査では14対の言葉を用いました。単純に平均値をとって図示すれば、ある程度のイメージがわかりますが、今回はより客観的にイメージを集約するために、統計的な処理を行いました。その結果、住宅系では2つの因子が抽出され、「整然さ」、「きれいさ」、「快適性」という言葉の相関が高く出ましたので、これらを『好感性』イメージと命名しました。また第2因子では、「親しみさ」、「温かさ」、「生活感」という言葉の相関が高く、これをまとめて『人間味性』イメージと命名しました。住宅系路地は、好感性と人間味性というイメージに集約できると思います。同様に、商業系路地、寺社系路地についてもイメージの集約を行いました。次に、分析結果を総合得点、いわゆる点数化して、各路地の順位づけを行いました。住宅系、商業系の上位5つの路地(写真)\*について、これから、皆さん方にイメージ評価をしていただきたいと思っています。また、イメージ評価で用いる言葉ですが、同じような意味合いの言葉や、一方で全くイメージに影響しないような言葉を整理して、今回は10対の反対語を選びました。皆さんに評価していただき、最終的に私どもが選びました路地の中で、ベストワンを選びたいと思っています。(結果は、P21をご覧ください。)

\*点数化したところ、非常に似かよった点数、まさしく同じような路地(写真)、が抽出されたため、必ずしも得点順位で上位5番目までではないものも選んでいます。

### パネルディスカッション 路地から福岡市の まちづくりを考える

●コーディネーター  
梶田 佳孝



(九州大学大学院工学研究院環境都市部門助教)  
これからのまちづくりを考える上では、今までの市街地開発事業ではなく、路地を活かしていくということが不可欠です。そのためにはどうしたらいいのかということについて議論を進めていきたいと思っています。

路地には、二面性があると考えられます。メリットとしては、道路幅員が狭いため車が入ってこられず、交通事故の心配がないこと、小コミュニティのスペースであるということで、歩く通行空間だけでなく、コミュニティ活動の場があること、空間の楽しさ、奥行き感があることなどです。デメリットとしては、やはり最大のポイントは災害の危険空間ということ。火事が起こると緊急車両が入られない。それと、下水道の整備などが進まず、ちょっと不衛生であるということです。少し暗いイメージがありますので、不安感とか不気味さも招いてしまう。折れ曲がった道は面白みもありますが、逆に不気味さもある。また、女性にとって非常に問題である犯罪空間としての危険性があるということです。路地を考えていく場合、こういったメリットを活かしながら、逆にデメリットをいかになくしていくかということが必要です。



左から石橋氏、吉原氏、小牧氏、森田氏

小牧 重己  
(福岡市住宅都市局建築指導課道路判定係長)

行政の立場では、路地の魅力というよりは、まずは路地に問題点がある

ということです。敷地と道路の関係でいいますと、敷地に建物を建てる場合、建築基準法上、まず幅員が4m以上の道路に敷地が2m以上接しなければなりません。基準法上の道路というのは、第42条第1項の中の幅員4m以上の道路、または、第2項の幅員4m未満の道路をいいます。これは、一般的に道路中心線から2m、敷地内であれば、そこまで道路としてセットバックしてください、というものです。この2項道路は狭隘道路ともいわれ、この道路に接する住宅の割合が、福岡市内には4割程度もあります。この2項道路はいろいろと問題がありまして、こういった違反が見られます。ある建物がセットバックして建て替わるわけですが、いつのまにか向こう三軒両隣を見て、どうも気分だけ下がっていて、前面も空いており、何となく使っても問題ないかな、という雰囲気になるみたいで、初めは花壇スペースを造って、植物を植えたりします。そうすると、いつのまにか植物は大きくなるし、さらにその後、建物の所有者が替わったりすると、花壇が扉が変わって、セットバックがなくなり、敷地内に取り込まれる事態が生じます。

**森田 美代子**  
(株式会社九州インターメディア研究所/  
 天神経済新聞編集長)

取材をする側としては、どうして細い道路や路地に出店をしているのかというのを聞く機会があります。わざわざ見つけてほしいとか、たくさんの人に来てほしいのだけど、やっぱり地元の人とか理解のある方に来ていただきたいとか、ちょっと回って気づいていただくことで自分のお店と思って気に入っていただくとか。路地は、言い方によっては「隠れ家」とか「穴場」というような形で、私たちは紹介をさせていただき、それでちょっと行ってみたいという気持ちになります。女性の目線でいうと、やはり安全性というところが気になりまして、夜に

なるとどうしても、道が狭かったり明かりが少なかったりすると、やはり一人では歩きにくいということもありますので、何か今後につながる対策を考えていきたいなと思います。

**石橋 知也**  
(福岡大学工学部社会デザイン工学科助教)

路地ということを考える前に、まずは道から考えていきたいと思っています。道と見ると、道路、街路、通りといったように、様々な表現や名前がついています。これは人が道と関わってきた様々な接し方の表れではないかと考えています。道の役割ということでは、出発地から目的地に至る移動の際に利用する都市施設であり、当然、安全性や利便性、そういったものが機能的に計画されているものです。やや比喩的になりますが、街路というものは都市の中に張りめぐらされた、ある種、血管のようなものではないかと思っています。渡辺通りは、福岡市のシンボルロードになっていて、来街者向けの街路です。大博通りなどもそうかと思われませんが、こういったのは大通りという格付がされると思います。一方、国体道路は国道202号線ですが、人通りが多くて賑わいのある街路であるということで、表通りという言い方ができると思います。天神西通りは、表通りに比べてやや人通りが少ない。こういうのを裏通りと言います。本題の細街路は、もはや公道ではないところも含まれていて、住んでいる人たちの共有道としての雰囲気を持つような街路で、こういったものを路地、横丁、小路などという言い方で呼んでいます。それぞれ性質の異なる街路がいろいろとバランスよく存在することで、都市の奥行き感というものも生まれてくるのではないかと考えます。

**吉原**  
 調査でロジをキョロキョロしてましたら、ガラッとおうちの方が出てこられて、

「どっか探してる？」と声をかけられました(確かに調査中の私は不審でした)。ロジが持つコミュニティによる防犯の力を再認識した次第です。ところで、ロジ自体、不動産の市場からすると非常に低い位置にあります。ロジの所有者からすると、買い取ってもらえるなら再開発も仕方ないのかと思います。ロジを使うことのプライドや、所有者のプライドが生まれることがまず必要で、逆にロジの不動産価値が高く評価される状況になれば、次第に再開発よりロジを残す意見になるのだらうと思います。

**梶田**  
 今残っている路地というのは、もともとの町並みとセットになっています。古い町並みが残り、それとあわせて路地も残っている。そういった意味でいうと、街区とかをしっかりと位置づけていこうということになるかと思っています。経済的価値、景観、生活面など、いろいろな指標の中で、どこが重要かということを考える必要があると思います。最後に、会場の皆様へお願いですが、皆さんが住んでいる周辺に路地は多分いっぱいあると思います。その場所を皆さんがたまに意識して歩いてもらうと、ここにこういうのがあったのかという新たな発見も多分あると思います。そこから自分の住んでいるまちに関心をもってもらい、さらにはコミュニティ活動に参加してもらい、そういったことを考えていただければと思います。



※所属・役職はセミナー当時のものです。  
 ※今回のシンポジウムの全容につきましては、当研究所のホームページに採録する予定です。

## シンポジウム会場での路地イメージ評価の結果

得られたデータを分析した結果、住宅系の路地では、「心地良さ」と「親近さ」のイメージに、また商業系の路地では、「繁华性」と「心地良さ」のイメージに集約できました。それぞれのイメージを統計的に得点化して、各路地(写真)の総合得点による順位付けを行った結果です。

### 住宅系路地



### 商業系路地



住宅系路地は、樹木等の緑、あるいは沿道家屋の質感などの違いが、また、商業系路地は、商店街の賑わい、あるいは沿道店舗の状況などの違いが、それぞれ評価に影響しているのではないかと推測されます。

なお、今回の路地イメージの調査研究については、来年3月に発行予定の「都市政策研究」第9号に掲載予定です。

(梶返)

# 路地をいかす まちづくりがある

まとめ



(財)福岡アジア都市研究所 理事長 樗木 武

## 路地をもたらすふれあい、にぎわい、安らぎのまち

まちの道すなわち街路は、単に地域を結ぶ道とは異なり、それ以外にも様々な働きがある。街並みなど都市を形成し、ライフラインを收容し、火災の延焼を防止するなど、快適で、安全・安心のまちづくりに寄与する。あるいは、暮らしやコミュニティの形成、賑わいの創出は街路なくしてはありえない。

こうした様々な働きをする街路を整備し、住民が最大限に活用することが本来のまちづくりである。しかし、現代の街路整備は、モータリゼーションの進展に処することを喫緊の課題とし、狭い細街路を改善し、自動車が進入できない、走行できない道の解消を図るとの方針が貫かれてきた。

あるいは街並みの形成は、道の幅に応じて建物の形態を規制し秩序を保つ策が取られてきた。その中で、建物に関し大きな容積率や高さが可能になるなどのインセンティブを与え、道幅を広げることが重視されてきた。

しかしながら、成熟社会、高齢社会の



到来に伴い、高齢者や子供など自動車に依存しない多くの市民が増えている。あるいは、車保有者でも四六時中車を利用することはない。散策や近くでの用務、買い物など、車を利用しない移動がある。生涯を通じれば、そうした移動機会は車によるよりもはるかに多い。

さらにいえば、自動車をもたらす交通混雑、事故および公害が社会的に問題であるが、これらに関係し自動車に大きく依存するまちづくりが市民にとり望ましいかは疑問である。場合によっては、人々のゆとりある暮らしを実現する観点から車を規制する考えもある。

もともとわが国では、向3軒両隣といわれるほどに、道を挟んで向3軒、こちらの両隣とでコミュニティを形成し、その中で人間味ある暮らしが築かれてきた。道を介し互いがふれ合う、助け合うなどの共同体の形成である。そしてそのためには、広幅員の道でなく、幅を含め身の丈にあった姿の街路が求められた。しかし現代は、車を尺度に街路を広げ、そのことで向3軒のコミュニティが切り離され、人間味のないまちになったとの批判がある。

上述を踏まえれば、自動車に依存せず、人を主とする街路の社会的存在意義が強調でき、そのことに配慮したまちづくりが本来的に求められる。市民が生活し、回遊する道、商売やイベントの場となる道、近所付き合いをする道など、暮らしの単位での街路のまちづくりである。

そして、こうした街路の一形態に、狭いながらも人々がふれあう道、にぎわう道、

安らぐ道がある。それらを路地と呼べば、路地を生かす向3軒両隣を原点にするまちづくりが現代なおも重要である。

## 細街路歩きから様々な路地の姿が見いだせる

路地は広幅員の道路や大通りではない。比較的狭い道であり、それを突き詰めれば細街路になる。したがって、少なくとも、細街路を調べ検討することで路地の姿や生かし方などが見出せる。

ところで、建物を建てる際の建築基準によれば原則4m以上の幅の道に接することが要求されている。しかし現実には、4m未満の細街路が福岡のまちの随所にみられ、状況は別図(P6~7)のとおりである。これらをもとに細街路が存在する背景や由来を探れば次のとおりである。

1) 都心地区には、中世からのまちとして形成されてきた商人町博多部と、近世の城下町福岡部の2区域がある。前者は豊臣秀吉の町割り、後者は江戸時代の城下町の構築が現在のまちの原点であり、それらでの街路整備が当該地域の細街路の原型になっている。また、両地域に隣接する中洲、西中洲、春吉、渡辺通、警固、今泉などにも、都心に同じ原点と歴史をもつ細街路がある。

2) 都心周辺地区は、都心に続く地区で、千代、吉塚、桜坂、谷、唐人町、地行、今川などである。これらは都心からにじみだすようにまちが形成された地区である。また、幕藩時代からの歴史をもち、都心に劣ら

ず福岡のまちの形成に寄与してきた。その一方で、都心と都市の周辺市街地との橋渡しをするまちとして位置付けられる。これらから、形態やデザインの上で地区毎にユニークな細街路を見いだすことができる。

3) 旧唐津街道は、近世の福岡市にとり重要な街道で、本街道に沿う宿場町が参勤交代など人の移動の活発化に伴い次第に発展してきた。香椎、箱崎・馬出、西新・藤崎、姪浜、今宿の諸地区がある。それらのまちを通過する街道および脇道などは、宿場町の形成と活動に重要な役割を果たし、その中で細街路が生まれ、現代に様々な交流史を伝えている。

4) 縄文、弥生遺跡など、周辺市街地は古代からの遺跡が多いが、基本は農村である。それが、戦後の高度経済成長とともに都市として急拡大した。このことから、前項までと異なるまちの姿が展開され、ベッドタウンとして発展したところが多い。その際、大規模な住宅団地や土地造成の区域は計画的なまちづくりであり、街路も整形的で、細街路はない。しかし、開発地周辺では、歴史ある地区が開発から取り残され、農村の性格そのままに住宅が集積した。このため、不整形であるが、その反面で手作り感のある細街路が多いことも事実である。

5) 市街化調整区域であるが、漁港のまちは、まち中に劣らず、あるいはそれ以上に家屋が密集し、細街路が集まる。これは漁業と関係し、また海に面する地形が影響してのことで、全体が細街路を基本にす

るまちであるといえよう。

こうした細街路の存在意義や歴史的背景、文化などから、それぞれの路地の姿が具体的に理解できる。すなわち、上述した細街路の背景と由来に従って整理しなおせば、結局は、歴史的意義が強い路地、ビジネス街、ショッピング街、飲食店街の路地、住宅街の路地、田園都市の路地および漁港まちの路地となり、それぞれに特徴ある姿をなしている。

## 路地のまちづくりの適切かつ意義ある推進を

路地は必ずしも4m未満の細街路とは限らない。しかし、4m以上の街路は法的に存在が認められているが、4m未満の細街路は、法の意図に従えばそのままではまちから姿を消す運命にある。

したがって、細街路の存在がまちづくりの上で課題であり、社会的に問題があるものは解消に向けた努力が必要である。

その一方で、存在意義があるもの、良質なものは保存し、細街路の姿のままに活用することもあってよい。あるいは、細街路の解消は長期間を要するが、その間、路地のまちの中でどのように快適に暮らすかも大切なまちの運営上の課題である。さらに、現代のまちづくりや建物づくりのデザインとして、路地が持つ人間性を生かし、あえて路地の理念を持ち込むこともある。

こうしたことから、路地をまちづくりの中でどのように位置づけし、取り扱うかが問題である。路地の姿を残し、まちの整備を押し進めるには、路地に対する確たる存在意義と関係市民の理解が必要不可欠である。

そこで、そのヒントに前項に述べた様々な路地を歩き、そこから路地の姿や意味を表現すると思われるキーワードを拾い出したものが表の諸内容である。

つまり路地とは、形状としての細街路をベースに、人と道とのかかわりの中で人々が抱く移動の道以上の心象をもって、暮ら

しと活動の中で造り上げられるものである。そして、そこから路地の姿および路地のまちを描く基本要素が見いだせる。それらが大別すれば、抽象的、意識的イメージがあり、利用と物理的イメージがある。

この路地イメージの拾い出しから、路地のまちづくりの検討・推進のあり方が自ずと浮かぶ。すなわち、物理的イメージは、路地のまちづくりを発想し、路地の姿を具体化するものに過ぎない。大切なことは、意識および利用イメージの積極的な検討であり、路地のまちとして市民の魂や心を込めることである。

前項に整理した様々なタイプの路地において、いずれを対象にするかを明らかにする。その上で、利用イメージを想定し、それに対して形成される意識イメージを組み立てる。これに、路地づくりの概念を明確にする意味で抽象的イメージを見いだす。その上で、広域街路および沿道との関係のもとに物理的イメージを発想し、デザインすることである。

要するに、まちづくりを考えるとき、大通りだけでは無味乾燥である。それに加え、路地の適切な存在が、まちの暮らしや活動に味を付け、まちの存在意義と豊かさを高めるものである。

見方を変えれば、路地をなくすことは、まちから歴史や文化を消し去ることであり、市民にまちへの愛着や誇りをなくさせることである。逆に、路地を生かすことは地区毎の個性を発揮させるもので、まちの文化を創造する原点である。

これらの意味で、路地を適切に生かし、地区協定に類する路地協定を結び、住民の努力と行政の支援とで路地の姿を創出することがまちにとって大切であり、成熟期のまちづくりの主要課題となる。



●表：路地のイメージとその要素

抽象的イメージ	文化・歴史・自然 美しさ・優しさ・なつかしさ・人情味 安全・安心・環境・快適さ
意識イメージ	ヒューマンスケール・身の丈のまち・愛着 庶民生活・簡抜け・開放的・心地よさ 無秩序・ごちゃごちゃ感・賑わい・交流
利用イメージ	町内会・地祭り・助け合い イベント・創造活動・共同活動 遊び場・井戸端会議・情報の受発信 安らぎ・休息・夕涼み
物理的イメージ	通り抜け・移動の利便性・交通手段の規制 回遊路・近道・散策路 横町(丁)・裏通り・行き止まり・たまり空間 狭隘道路・通路・小路・すき間道

# データで見る福岡市 vol.8

Data of Fukuoka city

(財)福岡アジア都市研究所 特別研究員 岡田 允

## ソフトウェア業の事業所比率が全国一高い福岡市

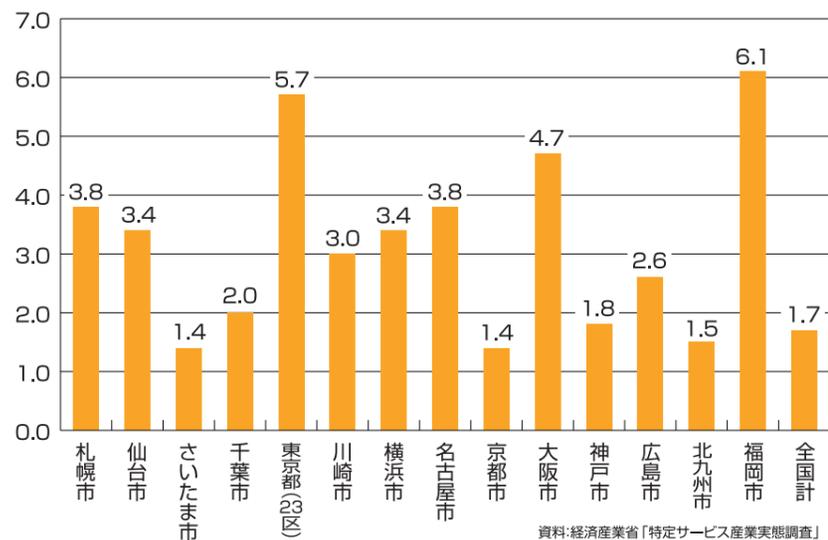
経済産業省が毎年実施している「特定サービス産業実態調査」結果によると、福岡市は総事業所に占めるソフトウェア業事業所比率が全国で最も高い。総事業所1,000当りのソフトウェア業の事業所数は6.1で、東京都(23区)の5.7を上回っている。

(注)ソフトウェア業とは、「受注を得てソフトウェアを開発する事業」、および、業務用のパッケージソフトやゲーム・ソフト、コンピュータ用等の基本ソフトなど「汎用」の製品(=ソフトウェアプロダクト)を開発する事業で構成されるが、全国的には、前者の売上が96.2%を占めている。

### 全国一のソフトウェア業事業所比率(相対密度)

図1は、「特定サービス産業実態調査」結果の「ソフトウェア業」事業所数の平成18年および19年の平均を、平成18年事業所統計調査結果による総事業所数で除して1,000当りに換算したものである。2カ年の平均を採ったのは、単一のデータでは起こりやすい特殊事情による偏りを回避するためであるが、「特定サービス産業実態調査」の内容が18年から変更され、同一基準での数字はこの2年間だけであるためである。見られるとおり、福岡市は、総事業所1,000当り6.1のソフトウェア業事業所が集積しており、東京都(5.7事業所)、大阪市(4.7事業所)を上回っており、

●図1：主要都市の総事業所1,000当りのソフトウェア業の事業所数



資料:経済産業省「特定サービス産業実態調査」

●表1：主要都市のソフトウェア業事業所数(単位:所、%)

都市	事業所数	対全国比
札幌市	284	2.7
仙台市	159	1.5
さいたま市	57	0.6
千葉市	57	0.5
東京都(23区)	3,190	30.9
川崎市	121	1.2
横浜市	375	3.6
名古屋市	496	4.8
京都市	111	1.1
大阪市	949	9.2
神戸市	134	1.3
広島市	145	1.4
北九州市	72	0.7
福岡市	429	4.1
全国計	10,337	100.0

資料:経済産業省「特定サービス産業実態調査」

ソフトウェア業事業所数そのものは、表1に示すように、東京(23区)が抜き出て多く、全国10,337事業所の30.9%を占めている。福岡市

名古屋市および札幌市(3.8事業所)に対しては1.6倍に達している。ソフトウェア業は大都市立地型の傾向が強いことから、この結果から、福岡市のソフトウェア業の事業所相対密度は全国で最も高いと言ってよいであろう。

は、429事業所で、大阪市949(9.2%)、名古屋市496(4.8%)に次いで多く、対全国比で4.1%を占めている(表1)。

### 厚い「中規模」事業所層

ソフトウェア業従事者規模別の事業所数を見ると、表2のように、福岡市は、10~29人および30~99人の中規模事業所の割合が大きいのが特徴である。「サッポロ・パレー」などの呼び名もあり、1990年代に福岡市のD2K(IT企業の有志で運営されるボランティア団体)とともに、地方圏における情報産業の集積拠点として注目された札幌市と比較すると、従業者9人以下の事業所割合は小さく(札幌市36.6%、福岡市29.8%)、10~29人および30~99人規模の事業所の割合が大きい(札幌市55.2%、福岡市64.1%)。「中規模」のソフトウ

●表2：地方中枢都市の従業者規模別ソフトウェア業事業所割合(単位:所、%)

	東京都(23区)	札幌市	仙台市	広島市	福岡市
総数	3,190	284	159	145	429
9人以下	927	104	51	50	128
10~29人	1,028	93	46	49	168
30~99人	804	64	44	34	107
100人以上	432	25	18	12	26
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
9人以下	29.1	36.6	32.1	34.5	29.8
10~29人	32.2	32.7	28.9	33.8	39.2
30~99人	25.2	22.5	27.7	23.4	24.9
100人以上	13.5	8.8	11.3	8.3	6.1

資料:経済産業省「特定サービス産業実態調査」

エア業の厚みがあることが福岡市の特徴である(表2)。

### 2,200億円を超える年間売上高

ソフトウェア業の年間売上高を見ると、表3のように、平成18~19年の平均で見て、全国合計は10兆3,868万円であるが、そのうち、東京都(23区)は全国の56.3%を占めている。その他は、大阪市(6.6%)、川崎市(5.3%)、横浜市(4.6%)、名古屋市(3.2%)など主要12都市がいずれも2桁に達しておらず、一極集中構造であることがわかる。福岡市は6番目で、2,200億円、対全国比2.1%を占めている。また、平成12・14年平均との比較では、5年間に、全国で38.5%増加しているが、千葉市(161.6%)、川崎市(75.8%)、東京(23区)(46.1%)など首都圏と神戸市(62.7%)でそれを上回っている。福岡市はこれら4都市を除く主要都市の中ではもっとも高く、平成12・14年平均の1,731億円から平成18・19年の2,200億円へと27.4%の増加であった(表3)。

●表3：主要都市のソフトウェア業年間売上高(単位:百万円、%)

	平成12、14年平均(A)	平成18、19年平均(B)	(A)~(B)増減率	(B)の構成比
全国	7,497,494	10,386,754	38.5	100.0
札幌市	116,584	147,095	26.2	1.4
仙台市	84,881	101,668	19.8	1.0
千葉市	46,644	122,024	161.6	1.2
東京都(23区)	4,002,347	5,846,467	46.1	56.3
川崎市	313,201	550,699	75.8	5.3
横浜市	404,766	482,786	19.3	4.6
名古屋市	276,364	333,453	20.7	3.2
京都市	115,459	84,753	-26.6	0.8
大阪市	546,039	682,202	24.9	6.6
神戸市	47,917	77,939	62.7	0.8
広島市	73,900	89,853	21.6	0.9
北九州市	38,368	45,860	19.5	0.4
福岡市	173,056	220,406	27.4	2.1
主要都市計	6,239,521	8,785,203	40.8	84.6

注:平成12、14年は「受注ソフトウェア開発」と「ソフトウェアプロダクト」の合計。  
資料:経済産業省「特定サービス産業実態調査」

### 同業者(関東、関西の大手業者)が多い契約先

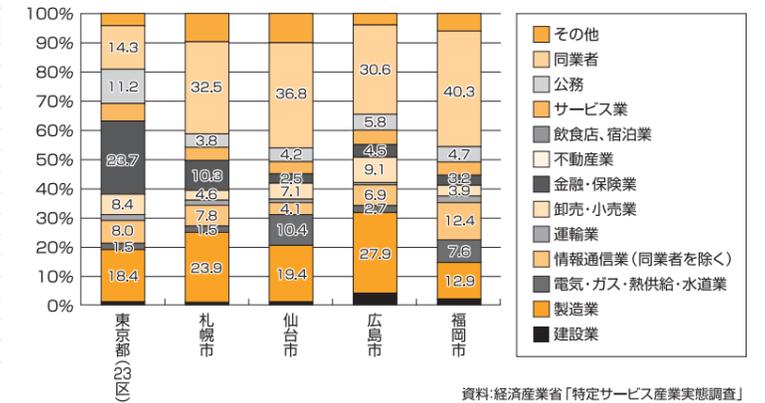
また、契約先産業別の年間売上高割合を見ると、図2のように、福岡市は、製造業(12.9%)および卸・小売業(3.9%)などとの契約割合が小さく、同業者(40.3%)、情報通信業(同業者を除く)(12.4%)、電気・ガス等(7.6%)などの割合が高いという特徴がある(図2)。

電気・ガス等や情報通信業などは地元需要であろうが、同業者の場合は、受注型のビジネス・ソフトウェア開発や情報家電、携帯電話等への組込みシステムの開発やゲームソフト等コンテンツの制作などで、東京等の大手ソフトウェア業からの請負(孫請け)が多いと考えられる。この点は、建設業界の構造に似ている。

### 20年来の福岡市産業政策の成果

福岡市が以上のようにソフトウェア業の相対密度が全国一高くなったのには、いくつかの要因が考えられるが、その1つとして、福岡市の適切な産業政策があるであろう。福岡市は昭和60年頃から、

●図2：地方中枢都市の契約先産業別年間売上高割合



資料:経済産業省「特定サービス産業実態調査」



(株)ネットワーク応用技術研究所取締役/九州組込みソフトウェアコンソーシアム副理事長/事務局長 芦原 秀一さん

九州のソフトウェア業従事者は、経済規模とほぼ同じく、全国の1割弱を占めているのですが、その70%程度が福岡市に集中しています。ソフトウェア業の業務内容から見ると、日本の得意とする「ものづくり」に関連する組込みソフト開発に携わる従事者は約2,000人、ゲーム・ソフト開発は約200人程度で、大部分がケータイなど通信系を中心にビジネス・ソフトウェア業務に携わっています。

福岡のソフトウェア業の特徴は、自社の製品を持っている会社もありますが、データの中にもあるように、契約先の最大分野が「同業者」となっており、東京、大阪、名古屋などの大手ソフトウェア業からの「孫請け」が多いことです。この場合、労働集約的な業務になりがちで、基準の契約単価が低く設定されており不利な環境におかれています。

2年前、自動車産業の進出があって、車載ソフトウェアの受注の期待もあったのですが、実現しないうちに世界同時不況に陥ってしまいました。今後とも需要が拡大すると見込まれるケータイ、家電、自動車、産業機械などの「組込みソフトウェア」の強化が課題です。それも、モデル化あるいはモジュール化し、独自の効率化技術を形成することを目指しています。さらに、エネルギー関連など新しいビジネス分野に取り組み、独自の強み分野を形成していくことが必要です。福岡市さんにも「組込みソフト開発応援団」の設立など、支援をいただいています。

## アジアの現代ダンス 2

# 韓国民衆文化の伝統と現代ダンスの感性

ダンス批評家/群馬県立女子大学専任講師 武藤 大祐

ここ数年、急速に変化しつつある韓国の現代ダンス。充実した大学の舞踊教育カリキュラムがようやく実を結んだともいえるが、最も若い世代の中から際立って見えてきたのは、自国の伝統文化を自由に解釈する新しい感性だった。われわれはそこから何を受け取れるだろうか。

### 朝鮮半島の最南端にて

10月中旬、韓国で開かれた批評家フォーラムに参加した際、ソウルからバスで4~5時間ほどかけて朝鮮半島の最南端に位置する統営市の海岸まで出かけた。最終日のプログラムとして、「南海岸別神グッ(ナムヘアン・ビョルシン・グッ)」という一種の豊漁儀式に立ち会うという企画が用意されていたためだ。

沖合の島々の光が少しだけ見えるほかは真っ暗闇の夜の浜辺。着々と準備が進められ、やがてチャンゴ(鼓)やピリ(笛)の演奏とともに、歌と祝詞、そして舞が始まる。大きな扇を持った一人の女性(巫堂)が、さりげなく素朴な所作をおりませながら語りと歌を聴かせる。海の神と先祖の霊に向け、豊漁と家族の繁栄を願う祈り。言葉の意味は韓国人にもあまりわからないとのことだったが、しかし腹にズーンと響くチャンゴの音や、コブシの利いたハスキーな歌声が、夜の波音に刻々と吸い込まれていくその場に身を置いていると、何ともいえず敬虔な心持ちにとらわれてしまった。一通り儀式が済むと、その場で貝や海老が網焼きにされ、酒とともに振る舞われる。忘れがたい風情のある酒宴だった。

統営にはこうした民俗芸能を保存・継承するための公立機関がある。海岸から引き揚げ

た後、さらにその建物の一室で深夜までさまざまな踊りや歌が披露された。韓国の伝統芸能の、一つのルーツともいべき場所がこの地域なのだという。重要無形文化財に指定されている各ジャンルの達人たちのパワフルな芸の数々に、韓国の伝統の凄味を全身で味わった。

翌日には早朝の国内線でソウルを経由して東京へ帰ることになっていたのだが、よくよく考えれば統営から九州まではもう目と鼻の先の距離。「泳いで帰った方が早い」などと冗談を飛ばしていた。実際、地図を見れば、半島から対馬を挟んだ対岸が福岡で、驚くほど近い。しかしその一方、韓国の民俗芸能のこんなディープな根つこの部分にふれるまでには相当の「道のり」があったことも確かだ。そもそも韓国という国の首都であるソウルを経由せずして、筆者がこの半島の南端へたどり着くことはなかった。つまり地理的な近さとは裏腹に、ここは日本からは相当に「遠い」場所でもあるのだ。わずかに海を挟んだ土地と土地の間の、大きな隔たり。一般には「国境」とよばれるその懸隔は、自然が作ったものではない。人間が歴史の中で作り上げて来たものだ。異文化に出会うことの驚きと楽しさは、この「遠さ」を、つまり歴史の堆積を、実感として噛みしめることに他ならない。



「南海岸別神グッ」の巫堂

### 韓国文化の基層とアーカイヴとしての歴史

ところで、いま世界各地でさまざまな展開を見せている現代ダンスの中で最も気になる存在は、と聞かれたら、韓国のキム・ジェドク(KIM Jae-duk)と筆者は答える。1984年生まれの彼の作品はまだ二本しか知らないけれども、新世代とよぶに相応しい感性が漲っていて、否応なく期待させられてしまうのである。

2006年の初演以来、何度も上演されている『Darkness PoomBa』は、客席内に立てられたスタンドマイクで歌手がパンソリを歌い、舞台上でギター、ベース、ドラムスの演奏が始まるとロックがそれに融合し、ジェドク自身も客席に降りて来てハーモニカを吹くという、祝祭的ともいべき賑やかさに満ちた作品だ。パレエやジャズダンスなど、さまざまなジャンルを呑み込んだダイナミックな振付で、ダンサーたちは男も女も伸びやかで力強く、ワイルド。

さらに兵隊か囚人のようなカーキの服を着た男二人組がアルミ食器をくわえて客席通路で取っ組み合うように踊るあたりは、朝鮮半島の現代史を視覚的に連想させる部分だが、それさえも作品全体に漂うハングリーでアウトローな空気の一部となっていて、文句なしに格好良いのである。韓国のいわゆる放浪芸人のイメージを中心におきつつ、パンソリを一種のブルースとして再解釈する発想の軽やかさ。伝統文化の表層を借りて来るのではなく、もっと深い基層にある民衆のメンタリティにジェドクは着目し、現代にも通じる要素を探り当てたといえよう。かたや2009年に発表された『Joker's Blues』は男性ダンサーのみの作品で、男臭さ(あるいは少年っぽさ)を思い切り強調している。過剰に速く荒削りでアクロバティックな動きが、ケレン味たっぷりのアクション映画を彷彿させる大胆な演出で展開される一方、前作よりも振付が細かく洗練されていて、雰囲気のみ頼らないアーティスティックな密度を高めている。男たちがバタバタ倒れては跳ねるように飛び起き、走り、ぶつかり合い、シャープで力強い線を描き出すさまは、手に汗を握るほどスリリングだ。

これまで韓国の現代ダンスといえば、伝統舞踊の語彙を用いつつアメリカのモダンダンスに倣った空間構成で仕上げているか、さもなければヨーロッパの最新スタイルを熱心にコピーしているか、というイメージだった。しかしキム・ジェドクは明らかに異質だ。何よりも、ポピュ



『Darkness PoomBa』



『Darkness PoomBa』右から2番目がキム・ジェドク(撮影(2枚とも)/Park SangYun)

ラーカルチャー的な感性がアカデミックなダンス・テクニクと同居しているところが新鮮で、それでいて自国の文化や歴史に対してもユニークな視点を持ち、作品の中に盛り込むことを忘れていない。またとりわけ韓国独特の「芸能」のあり方、つまり下層の民衆文化に由来する、客席と舞台が一体となって熱狂するような上演のスタイルをはっきりと打ち出してみせている点は見逃せない。ヨーロッパ流の洗練された「アート」や、アメリカ流の「エンターテインメント」とは違う、猥雑で無軌道なこの「芸能」という価値観は、特に韓国ではシャーマニズムと強い親和性をもっている。すなわち、文字通り我を忘れて没頭する踊り手たちの「忘我」(エクスタシー)の境地と、それに立ち会い、煽り立てる「民衆」の精神である。だから、統営でさまざまな伝統芸能を見た時、ジェドクのやっていることがよりはっきりと理解できたような気がした。彼は、奥深い韓国の伝統を対象化しつつ、その厚みの中から自分なりの表現の形をつかみ出しているのだ。ここにはいわゆる文化的アイデンティティを身に纏おうと躍りになっていた過去の民族主義的な世代とは異なる、新しい歴史意識が見て取れるように思う。つまり彼にとって歴史とは、何か背負うべき重荷やプライドなどではなく、自由に選択し、解釈を加え、軽やかに戯れることのできる素材の収蔵庫(アーカイヴ)なのではないか。

### アジアのダンス、その「ローカル」な想像力

こんな風にアジアの現代ダンスを見ていると、一般にメディアを通じて流布している諸地域の文化に対するイメージがしばしば覆されるのを感じる。あるいは表層的な知識が、より深く、具体的で切実なものへと変わる。なぜかといえば、ダンスは本質的に「ローカル」なもの、土地に根差したものであらざるを得ないからだ。アーティストたちは、それぞれの場所のローカリティと、そこに生きる身体の中に、新しい表現の可能性を探り当て、提示してくれる。文字や映像では伝わらない、個々の「場所」に濃厚に立ちこめる空気、それを身体は吸い込んで運ぶのである。体と体で向き合っているダンス

の情報量の豊富さには、他のどんな媒体も太刀打ちできない特殊なものがある。そしてそれはとりもなおさず、個々の多様な「場所」の豊かさでもある。

日本ではまだまだアジアの状況にふれる機会は少ないが、福岡は貴重な例外だ。アジアの作家を紹介する「アジア・コンテンポラリーダンス・ナウ!」(主催:(財)福岡市文化芸術振興財団・福岡市)は順調に回を重ね、2009年度は北京の社会派、ウェン・ホイ(Wen Hui)が来日した。出稼ぎ労働者や農民などといった社会的なテーマを扱い、積極的に現実世界にコミットしていく彼女の的方法論は、これもまた、いかにも中国的といえるが、今回は地元の「50歳以上の女性」限定のワークショップを通じて市民参加作品を制作。「食べ物」や「好きな歌」などといった素材を用いて、ごく個人的な記憶や感情を引き出し、一人一人の生のありようを浮かび上がらせる美しい作品だった。

さまざまな土地に根差した多様な価値観と想像力が、アジアには無数に息づいている。やがて福岡という土地から新たな「アジア」のダンスが発信されていくことを期待したい。



アジア・コンテンポラリーダンス・ナウトリエンナーレススペシャル「fighting with body」(写真提供:(財)福岡市文化芸術振興財団)

#### むとう だいすけ

1975年東京生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学(美学芸術学)。群馬県立女子大学専任講師(美学、ダンス史・理論)。ダンス批評家。共著『Theater in Japan』(ドイツ、Theater der Zeit)、論考『差異の空間としてのアジア』(『舞台芸術』12号)、『反スペクタクルと無意味の狭間』(『シアターアーツ』30号)など。『シアターアーツ』、『MOMM』(韓国)にて時評を連載中。2008年より Indonesian Dance Festival キュレーター。

# 第8回アジア太平洋都市サミット実務者会議IN福岡開催!

(財)福岡アジア都市研究所 交流推進係長 アジア太平洋都市サミット事務局 山本 公平

【会議概要】テーマ:文化芸術活動による都市の魅力づくり 【参加都市】7カ国17都市  
 ■9月17日【視察】行政視察:福岡アジア美術館、福岡アジア文化賞 企業視察:イムズ 市民活動視察:紺屋2023  
 ■9月18日【本会議】基調講演:吉本光宏(ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室長)

## 各都市発表

福岡市:文化振興課、市民:TRAVELERS PROJECT 主宰 野田恒雄(紺屋2023)  
 市民:アートサポートふくおか代表 古賀弥生  
 釜山広域市:文化芸術課  
 シンガポール:情報芸術省  
 バンコク都:文化・スポーツ・ツーリズム局政策・企画部

今回は都市サミットの実務者会議です。サミットは市長会議ですが、実務者会議はその名の通り、主に市長以下の役所の実務者が集い、都市問題の解決に資するものです。見出しにはビックリマークなんかつけて、威勢が良い感じですが、果たして実のところどうだったのか。その所を鈍い頭で出来る範囲で鋭く追求してみたいと思います。

## そもそもサミットって?

さて、最初に意図したこと。それは“ユーザーのニーズ”を捕らえることです。通常の市役所の仕事では、ユーザーは市民である場合がほとんどです。しかしこのような国際会議の場合には、最終的な利益が市民にもたらされることは変わりませんが、直接のユーザーが市民そのものになるとは限りません。私が担当した3年前の時点で感じたのは、この会議は、どちらかというと行政のネットワーク組織としての役割が大きいことで、実際のユーザーも自治体職員がほとんどになっていました。これは果たして理想的なサミット像なのだろうか。そんな疑問も持つようになりました。



それでは、当初この会議が何を意図して開始されたのか、平成5年に作成された、会議の趣旨を以下に引用します。『福岡市が中心となって、アジア太平洋地域の主要都市等で構成する会議を開催し、行政機関、金融、卸売、情報、教育、文化などの中枢機能が集積した本市の特性を活かして、アジア太平洋地域の主要都市等との都市の連携やネットワークを構築し、都市レベルでの相互交流・国際協力を推進することにより、東京が世界都市をめざすのに対して、本市は日本における「アジアの交流拠点都市」をめざすものであり、ひいては、アジア太平洋地域の発展に寄与することを目的とする。』とあり、その効果として「アジア太平洋における福岡市の認知度の高揚・アジア太平洋との交流分野の拡大・本市としての国際貢献施策の充実・本市のまちづくりの参考」の4つが掲げられています。かなり立派な内容です。これは約15年前のもですが、当時はまだ、日本がアジアにおいて、明らかにトップを走っており、上記の様なことを自治体レベルでも、本気に謳える時代でした。もちろん今でも同様の気持ちは残っています。しかし現実的にはシンガポール、韓国、そして特に中国から、いくつかの面で、既に日本

は凌駕されてきています。企業の規模はもちろんのこと、お家芸であった先端技術や、政治力においても、相対的に弱体化してきています。正

直に言って、現時点では、なかなか先の様な発案はしがたい状況になっている気がします。

これには、様々な要因が考えられますが、その中の一つが国際化認識の遅れが挙げられるでしょう。つまり急激に進化したグローバル化の波に対応出来なかったのです。これで、多くの日本企業は、欧米だけでなく、韓国や中国の企業にも遅れをとることとなりました。この様な現象は、なにも企業間だけのものではありません。国家の政策をリードする官僚はもちろんですが、地方分権の流れにあつては、自治体職員でさえも、グローバル化の現実を捕らえ、その波に乗れるような政策を立案する責任が一層大きくなります。しかしながら、現実、既に遅れを取った日本企業以上に、自治体のドメスティック化が進行して来ているように思います。これは、経済情勢の悪化といった現実的な問題や、行政に対する市民の信頼低下とそれによる目線の変化、そして日本全体に蔓延する未来への不安や希望の不在が生み出す社会情勢が、次世代の国際的視野をもった人材育成に、マイナスの効果を及ぼしているからかもしれません。

## 漂流するサミット

今となっては、大言壮語とも言われかねないような、アジア太平洋都市サミットの当時の趣旨ですが、その10年後の平成15年に策定された「福岡市国際化推進計画」では、以下の様に表されています。『●アジア



太平洋都市サミットの推進:アジア太平洋地域の首長が一堂に会し開催するアジア太平洋都市サミットを通じて、都市が抱える共通した課題の解決のために、各都市が有する経験やノウハウを共有し、都市間協力を推進していく。』どこまで、意図されたかは不明ですが、平成5年からの10年で、アジアにおける日本の位置が大きく変化し、それに伴って、人も企業も自治体もスケールダウンしてしまった部分があるように感じます。そしてそれぞれの事業において、当初想定していた大きな夢は徐々に失われ、個別の目標へと分離分散し、限定化され、あるいは終に雲散霧消の運命をたどることになります。これは具体的な目標や数値的な成果を、重視するようになった時代の風潮でもあり、良い部分も大いにあったわけですが、そこで失われた“骨太の方針”といったものが、今また求められているようにも思います。

現実の社会では、製造業の世界だけでなく、福岡市お得意のサービス業でさえ、グローバル化の進展はとどまることを知りません。あらゆる分野の小売業や飲食店、エンターテインメントなどはや、グローバルに展開できない企業は生き残り困難な世界が目前に迫っています。そして、企業だけではなく都市間でも競争が激化してきています。産学官の連携無くしてこの競争に生き残れません。

## あしたのサミット

この様な世界情勢の元で、私は、アジア太平洋都市サミットの役割は、再度大きく変わる必要があると考えています。もちろん当初の趣旨は立派なもので、今でも基本方針を変える必要はありませんが、時代に合わ

せてその重心を変えていくべきでしょう。

極めて簡単に言えば、

- ・平成5年:日本躍進時代→アジアの交流拠点都市を目指す(基本方針)
- ・平成15年:日本停滞時代→サミットの機能を都市間協力・連携に限定する
- ・平成21年:日本追従時代→アジア・世界の中で取り残されないように、海外の都市情報を会員都市や市民のために収集・発信し、国際意識を高揚させ、産学官が連携してグローバル化に追従出来る人材を育てる。

前置きが長くなりましたが、この際のユーザーは、参加都市の行政職員や企業社員、そして市民など、広範な人々となります。これは、その趣旨からしても、一時期かなり自治体職員向けになっていたものを、今更で



はありますが産学官の共働事業に、少なくとも行政以外の人々にとっても、意義のあるものにしていくといった作業になります。ただし多様なユーザーのニーズを捕らえることは非常に困難であり、とりあえずは、共働作業を進めながら、探って行く程度のことしか出来ません。このことについては、ウルムチサミット以降意識的に取り組んで来ており、サミットや実務者会議の際には、必ず市民主体のワークショップを盛り込むと言った形で、徐々に推進しています。今回は久々の福岡市での開催でもあり、出来るだけ多くの行政職員以外の方々にも関わっていたきたいと思い、企画段階から、民間の方の声も取り入れながら、視察先や発言者として地元の市民の方々に参加してもらうことが大きな狙いでした。しかしながら他都市については、以前のように海外からの招へい経費も負担できない状況で、余所からの民間の参加については、要請はしたものの、実現は出来ませんでした。

## はてさて結局の所…

さて、その結果はと言うと、客観的には、近日中にアジア太平洋都市サミットホームページ(「資料ダウンロード」バナーあり)にアップする参加者のアンケート結果をこらんでいたのですが、主観的には、形式的な部分では、発表内容も含めかなり充実した、貴重な情報提供が出来ました。(これはサミット=福岡市のネットワークがあったからこそ実現出来たと言えます)特に海外の都市、釜山、シンガポール、バンコクの先進事例発表はかなり刺激的なものでした。アジアの諸都市が日本以上に戦略的・長期的な視点で文化政策を推進していることが明らかになりました。また、基調講演をお願いした吉本氏や市民の立場で参加いただいた野田氏、そして古賀氏からの発言内容は、海外も含め参加者の高い評価が得られました。(多くの方から時間が短かった。もっと聞きたいとの意見があった)さらに、民の立場からの文化政策に対する厳しいご意見や、この会議の意義への疑問を示されるなど、行政同志では得られない大変に示唆に富んだものであり、反省させられる部分も多くありました。例えば、会議の実体的な所では、活発な意見交換や、質疑応答などが進まず、多くの課題を残したと考えています。これについては、4カ国語同時通訳(実際には7カ国語に対応)による、コミュニケーションの難しさだけでなく、事前の情報提供や、そもそものテーマ設定の問題もありましたし、特に人事異動が激しい日本の自治体職員や、テーマ担当者が参加しにくい都市もある、といった如何ともしがたい行政連携の限界も痛感することとなりました。民間の視点から見ると、まだまだ甘い部分も多く、最も形式的で堅苦しい行政主体の事業から、双方にとって意義のある、産学官連携事業への道のりはまだまだ遠いと感じました。本当に小さな一歩を踏み出したばかりです。紙面の都合上詳細については後日ホームページにアップする報告書をご覧ください。

# 第8回アジア太平洋都市サミット実務者会議IN福岡

## 「文化・芸術活動による都市の魅力づくり」で「市民参画・協働プログラム」が目指したもの

(財)福岡アジア都市研究所 研究主査 山下 永子

- 都市間ネットワークって何だろう → 都市が主催する国際会議って何だろう → 世界の都市と「人と人」レベルで「生活・日常」の視点で「対話・交流」できる「ツール・場」なのかも 😊
- だったら、オープンで楽しい会議を開こうじゃない → ゲストもホスト(市役所・URC・市民)も笑顔で過ごせるような、で、ためになるようなプログラムを実践してみよう 😊
- ここでは、実務者会議IN福岡の初日17日に実践した、市民とともに、市民に愛され、市民が楽しめ、市民に役立つ、市民が喜んで巻き込まれるようなプログラムをご紹介しますとともに、その「目指したもの」についてお話しします 😊

### アートのカ・役割を都市に示す —ソーシャル・インクルージョン—

「文化芸術による都市の再生・都市の魅力づくり政策の展開」は、いまや世界的なブームを超えて、メインストリームになりつつある。

それは、単なる「公による文化芸術振興施策」ではなく、都市構造の変革、市民参画の促進、弱者・少数者の社会参画機会創出など、都市の生態系を新たに創造していき、新たな都市の活力をしていこうという一大都市戦略であり、ムーブメントとなってきている。

アートが弱者の社会参画を促すツールとなりうること、地域経済に参加することで、弱者・少数者が社会の一員として誇りを持った生活を送っていけるようになることの大切さ(ソーシャル・インクルージョン)。私たちは、そういうメッセージを今回の実務者会議で発信したいと思った。そして、そのメッセージを福祉作業施設「工房まる」とのデザインコラボという可視化されたアクションに託したのである。

具体的に行ったコラボは①シンボルマークのデザイン、②シンボルマークを用いたマテリアルの製作(バック・プログラム・名札)、③市民交流パーティーにおけるアートライブパフォーマンス。

この「工房まる」とのコラボは、それだけでニュースになり、地域メディアに2度取り上げられ、このような活動や施策が社会的に認知される機会を拡げることができ、また、参加者からも心温まる良い試みであるとの評価もいただいた。

市民の国際会議への関わり方、行政の芸術文化支援のあり方の実験的試みの1つは、一定の成果を得られたのではないかと思う。



「かわいい」バック・名札・プログラム



「なんかわくわくする」スケジュール表



芸が細かいイラスト「思わず見入る」



前夜祭「市民主催の交流パーティ」にて、アーティスト松永大樹氏・太田宏介氏が1時間かけて大作を製作・披露

### パブリックはプライベートと プライベートが重なるところに生まれる —民の現場に踏み入ることが第一歩—

とは、「紺屋2023」を手がける野田恒雄氏の弁。「なぜ民間が公みたいな事業を手がけるのですか？」みたいな質問に対して、野田氏はそういう風にいつも答える(ていたと思う)。とても好きな言葉なので、文脈無視して引用してみた。いや文脈に繋げていくようにもっていかなければ。。。

さて、都市における「文化芸術活動」の担い手は誰だろう。プロのアーティスト

ト?アマの趣味人かしらん。では、「文化芸術支援」の担い手は誰ぞなもし。行政?文化芸術施設の学芸員?アートNPO?企業?市民?建築家?

思うに、多分、その答えは「みーんな」なのだ。

都市とは多様な人・アクター・機能・ビジネス・なんでもが重層的に集まり形成される「場」、なので、プライベートが重なる場=パブリックではないだろうか。だから、文化芸術で都市の魅力づくりを政策として展開していこうと言うときに、自治体は行政の「お金を使った活動や支援」だけを見ても不十分。重なる部分を掘り活発にしていくことが、支援やコラボの真髄なのだから、重なりたい相手「民」の活動を現場を生むの声を聞いていかないと!

そんな主旨で、今回の会議では、初日に「イムズ」「紺屋2023」にお邪魔し、現場レクチャー・視察をさせていただいたのである(ご協力ありがとうございました)。



歩いて移動も福岡を知ってもらおういい機会、大名はゲスト曰く「LOVELY」!



民間による古アパート再生プロジェクト「紺屋2023」には多種多様な入居者が様々なジャンルのアクティビティを展開、アート作品UFOパーキングのある屋上で青空レクチャー

### 都市政策の情報交換は自治体同士 だけではなく官民協働が有効なり —民といかにつきあい、巻き込むか—

「工房まるとのコラボ」、「民の現場の訪問」は、今回の「市民参画・協働プログラム」のほんの一部であるが、こそと、ちょっと大きな一歩だったと思っている。

行政(URCは行政じゃないけど)が、デザインを外部に委託する行為は、普通「業者に発注する」と言う。でも、今回は「参加してもらおう」という姿勢で態度で臨んだ。アートライブは、「お客様をもてなし、ともに社会の一員として楽しもうよ」そんな気持ちでお願いした。そういうお誘いに、「工房まる」は喜んで乗って来てくれた(と思う)。

これは「ぼやきと言うか、つぶやき」だけど、最近は行政財政が厳しくなって、何かを民に発注するとき、とにかく厳しい予算で、「お願い我慢してやって」みたいな頼み方、というか、金額優先の「競争入札」を行うことが多くなってきて、「業者」さんである民が「楽しんで喜んで」

行政と仕事を一緒にやれる機会が減ってきた。

「イムズ」「紺屋2023」にはボランティアでレクチャーやコーディネートをお願いしたのだけど、それに乗って来てくれたのは、「一緒に福岡の魅力を発信していこう」という趣旨に賛同してくれたからだと思う。そして両者とも、国境・文化を越えた様々なゲストとの交流が、自分たちの生活やビジネスの刺激になると思ってくれたからかもしれない。

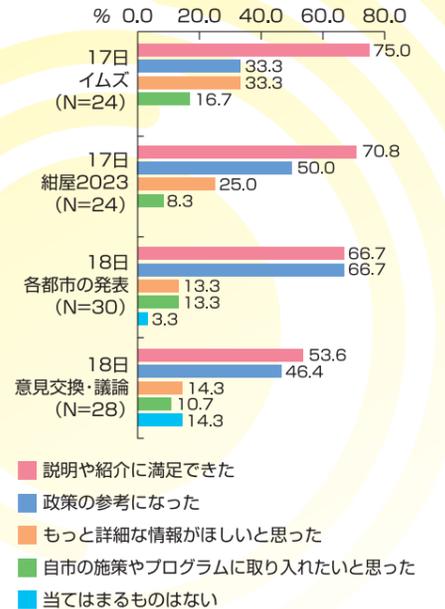
国際会議や都市ネットワークは、市民・企業が、そういった刺激を得られる場であり、そういうふう感じてもらうような仕組みを設けていくことが、行政、URC、アジア太平洋都市サミット事務局の役割ではないだろうか。

国際会議や都市ネットワークは、民を巻き込み、一緒に何かを発信していく良い「ツール・場」だ。

17日の「市民を巻き込む」試みは、アンケート結果からも、18日の「工夫はしたけどプチ普通スタイルな国際会議」に負けない評価を参加者から得られた。

アジア太平洋都市サミットに限らず、自治体、行政施策全ての場面で、「民を巻き込む仕掛け」が増えていけば、もっと面白く輝く「公の事業」が展開されていくのではないかと思う、「がーんば」。

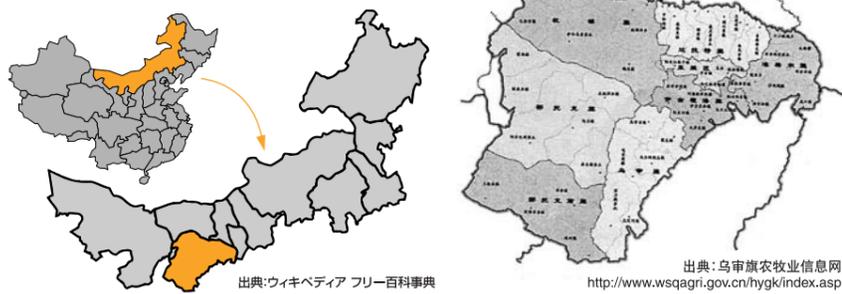
### ●第8回実務者会議IN福岡の個別プログラム評価



# 内モンゴル地区の都市開発

(財)福岡アジア都市研究所 副理事長 松本 法雄

●図1：内モンゴル自治区、オールドス市



8月9～10日に開催された中国人間居住環境委員会主催の第5回全国大会に参加し、福岡市の都市景観形成に対する取組の報告を行った。場所は内モンゴル自治区烏審旗(以下;ウーシン旗)である。今回当地を訪問してこれまでの知識のなさを痛感することになる。まさに、百聞は一見に如かずの通りであった。

さて、内モンゴル自治区は面積118.3万km<sup>2</sup>であり、我が国国土面積37.7万km<sup>2</sup>の約3倍を有する。その内モンゴル自治区は9地級市で構成される。そのうちの一つがオールドス市で、市には一つの市轄区と7つ旗があるがその内の1つがウーシン旗である。因みにオールドス市の面積は約8.7万km<sup>2</sup>であるから九州全体の約2倍である。(図1)

居住人口約10万人のウーシン旗はモーウス砂漠の中のオアシス都市であるが、そのオアシス都市がいきなりとも思える大規模な都市開発になぜ乗り出し得たのか?その理由は従前からの豊富な石炭に加え、確認埋蔵量約1.2兆m<sup>3</sup>(世界第3位のカタールの約1/20)、今後調査が進

めばその3倍になると予測されている天然ガスの発見と採掘の開始にある。

さて、ウーシン旗の都市開発の理念は「環境と調和し持続的な発展を目指した都市づくり」であるが、中央政府から「中国人間居住環境模範都市」に指定され、政府の支援も受けながら主要インフラの道路、公園、住宅建設等が進行中である。この開発を支援しているのが中国人間居住環境委員会である。

開発計画は写真1,2の通りである。砂漠の中のアアシス都市であることや近年の砂漠化の拡大を踏まえ市街地周辺を取り囲むようにグリーンベルトを配置し、その中に公共施設、住宅、コンベンション施設などを配置している。

工事は順調に進んでおり、写真3及び写真4のように美しい自然景観を創り出しつつある。砂漠の中の都市と考えていたウーシン旗であったが、これらの緑豊かな景観を創り出しているのは、豊富な資金に加え年間400mm近い降雨量(福岡市の年間降雨量の1/4)があることと地下水の利用による灌漑の普及にある。10年後、

ウーシン旗がどのような変容を成し遂げているか今から興味深い。

さて、ウーシン旗からオールドス市の中心である東勝轄区に戻る途中に伊金雀洛旗(エジンホロ旗)がある。エジンホロとはモンゴル語で「君主の聖地」を指すそうである。君主とはチンギス・ハーンのことであり郊外には彼の陵墓が存在する。写真5はそのエジンホロ旗のメインストリートである。交差点部には商業ビルが立地し近代的な中心市街地の景観を有しており、中心市街地外縁部に再開発が大規模に進行中である。

最後に、オールドス市の行政の中心地区である東勝轄区では、市庁舎、議会、裁判所等の行政機関の移転を核とするまちづくりが進んでいる。庁舎や主要幹線道路は完成し、現在は集合住宅が大規模に建設中である。(写真6,7)

官庁施設群の建設場所から、直線で約4km、幅100m以上の緑道と幹線道路のちょうど対岸となる地点には黄河から導水した池と600mの人工の滝を建設中である(写真8)。

今回の視察では躍進する中国の底力をまざまざと見せつけられた。一方で、視察の途中で垣間見えたモンゴル族の伝統的な生活様式、生活習慣を後世にどのように継承するか、今後拡大するであろう所得格差をどのように埋めていくか中国全体の知恵が試されている時期かもしれない。



写真1：ウーシン旗開発計画図



写真2：行政中心地区ベース



写真3：メインストリート



写真4：噴水のある公園



写真5：エジンホロ旗中心部



写真6：東勝轄区市庁舎裁判所議事会とモニュメント



写真7：メインストリートとモニュメント



写真8：人工池と人工滝の建設現場

# INFORMATION

[インフォメーション]

## EVENT イベント

### ●(財)福岡アジア都市研究所 平成21年度市民研究員研究成果発表会

テーマ:人と自然が共生する美しい都市

日時:平成22年2月20日(土)14:00~16:30

場所:アクロス福岡セミナー室2(福岡市中央区天神1-1-1)

内容:5名の市民研究員のみなさんに、「人と自然が共生する美しい都市」というテーマのもと、それぞれに関心ある個別テーマについて研究いただいています。様々な切り口が考えられる奥の深いこのテーマについて、それぞれ違った角度から「美しい都市」に向けた方策を考え、福岡市への提言を発表します。みなさまのご参加をお待ちしています。

※募集開始は1月中旬(予定)。ホームページ等でお知らせします。

※定員50名 入場無料(申込先着順)

### ●都市セミナーの開催について

1月下旬~2月上旬に開催を予定しています。決まり次第、ホームページ等でお知らせします。

## 賛助会員制度

年会費(法人一口:10,000円、個人一口:5,000円、学生一口:2,000円)をお支払いいただくと、さまざまな特典が受けられる賛助会員制度があります。詳しくは、(財)福岡アジア都市研究所までお尋ねください。

TEL:092-733-5686 FAX:092-733-5680 E-mail: info@urc.or.jp

- 特典 —— 1. 研究所主催のセミナー等の開催情報をお知らせします。
- 2. 都市情報誌FU+を毎月1部無料でお届けします。
- 3. 研究紀要を毎月1部無料でお届けします。
- 4. 中国動向・韓国動向を毎月1部無料でお届けします。
- 5. ニュースレター「都市研」を毎月、eメールまたは郵送により無料でお届けします。

## 都市政策資料室

(財)福岡アジア都市研究所の都市政策資料室では、アジア地域を含む都市政策関係図書、各種調査・研究成果報告書、行政資料などを幅広く収集・公開しております。また、アジア開発銀行の寄託図書室の指定を受けております。どなたでもご利用いただけます。皆様のご利用をお待ちしております。

開室:月~金10:00~17:00

(土曜日・日曜日・祝日・年末年始・毎月最終業務日・資料整理期間(不定期)は休み)

蔵書検索:研究所のホームページから資料室の図書・資料が検索できます。



## バックナンバーのお知らせ

- |  |  |  |  |
|--|--|--|--|
| <p>第1号<br/>(2006年12月25日発行)<br/>特集 博多駅<br/>—現在・過去・未来—</p> | <p>第2号<br/>(2007年3月30日発行)<br/>特集 まち歩き<br/>—まちの魅力再発見—</p>     | <p>第3号<br/>(2007年6月22日発行)<br/>特集 地域の商店街<br/>—賑わいのある商店街をめざして—</p> | <p>第4号<br/>(2007年12月14日発行)<br/>特集 国際交流・貢献<br/>—国際化の取り組み—</p> |
| <p>第5号<br/>(2008年7月31日発行)<br/>特集 URC20周年</p>             | <p>第6号<br/>(2008年12月24日発行)<br/>特集 まちかどイベント<br/>—人・文化・集客—</p> | <p>第7号<br/>(2009年6月26日発行)<br/>特集 低炭素社会<br/>—温暖化対策を越えて—</p>       |  |

※当研究所のホームページからご覧いただけます。

## ●編集後記

特集では、路地を様々な角度から取り上げました。自分たちのまちへの愛情や誇りが感じられ、組織や校区の活動、新たな取り組みなど多くの方が様々な立場で関わっていらっしゃることを実感しました。ご寄稿・ご登場くださった皆さまに深くお礼申し上げます。かくいう私もどちらかという道幅が狭く車通りも少ない住宅地に住んでいます。野良猫も遊びにくるし、落ち着きますね。猫といえば、「長崎さるく博」取材(第2号)で訪れた長崎。坂の路地に入るとしつぽの短い日本猫ちゃんがたくさん!とビックリ。「日本『長崎ねこ』学会」様からいただいた記事は興味深いものでした。(瀧山)

## ●次号予告

第9号 2010年6月下旬発行予定

## ●ご意見・ご感想募集中!

「都市情報誌FU+」に関する皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。誌面づくりの参考にさせていただきます。今号およびこれまでの内容、あるいは今後取り上げて欲しい内容などについて郵送・FAX・E-mailのいずれかの方法で下記宛先まで。その際はお送りくださる方のご住所・お名前をご明記ください。お礼として、10名の方に「都市情報誌FU+」第9号をお送りします。

都市情報誌FU+(エフ・ユー プラス)第8号  
2009年12月18日発行

## ■発行所

財団法人福岡アジア都市研究所  
〒810-0001 福岡市中央区天神1-10-1  
福岡市役所北別館6F  
TEL: 092-733-5686  
FAX: 092-733-5680  
E-mail: info@urc.or.jp  
URL: http://www.urc.or.jp

## ■編集責任者: 桑田哲志

■編集スタッフ: 瀧山直子 水谷杏子

■デザイン・印刷: 秀巧社印刷株式会社

■表紙・グラビアデザイン協力:  
TEAM UKS PROJECT  
(九州大学大学院 統合新領域学府)  
ユーザー感性学専攻 修士課程